

帝國讀本
新制第二版
卷三

4a
810
昭9

41575

教科書文庫

4
810
41-1934
20000 72689

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

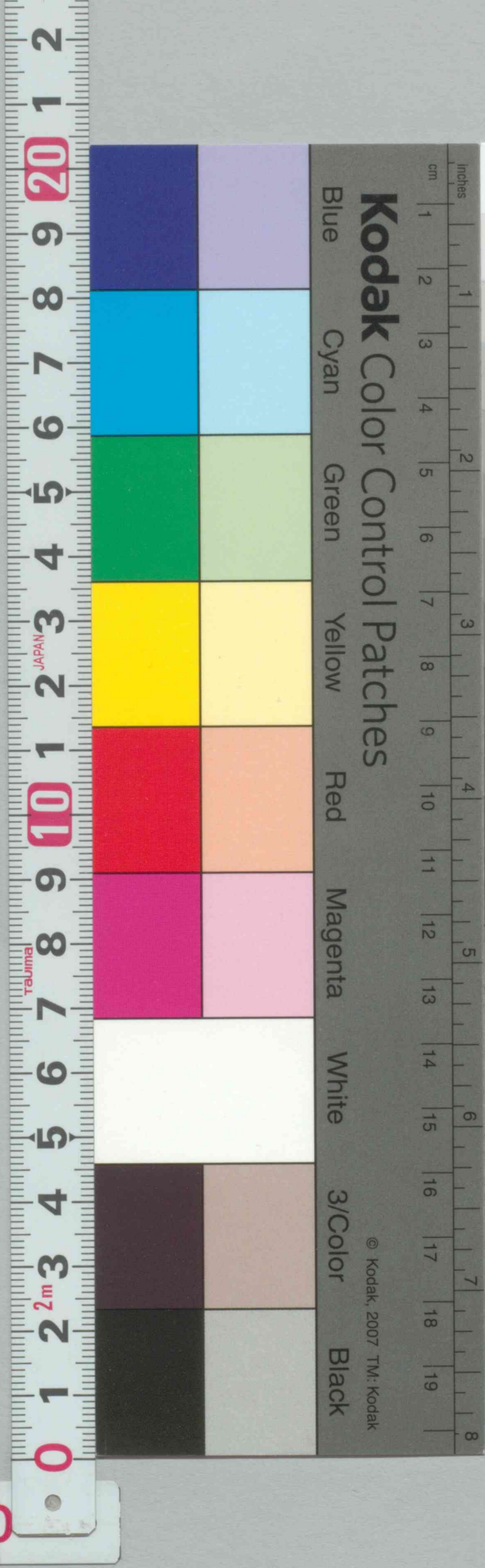
G
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
BB9

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學士 長谷川福平 訂補

帝國讀本

新制第二版

文部省檢定
昭和九年十一月二日
中學校國語漢文科用

合資會社 富山房發兌



尾張の信長 岩佐古香筆



帝國讀本 新制第二版 卷三

目次

一 大日本國(詩).....	一
二 八雲立つ出雲.....	二
三 春の一日.....	三
四 勿來の關(戲曲)その一.....	四
五 勿來の關(戲曲)その二.....	三
六 お遍路さん.....	三
七 暮春の野.....	三
八 喬木(詩).....	三
山四題(自修文).....	四

九	佛の化身	相馬御風	五
一〇	師の恩	柳澤洪園	六
二	桶狭間の戦その一	遠山信春	三
三	桶狭間の戦その二	遠山信春	六
	辛抱くらべ(自修文)	松村介石	七
三	六月の朝(詩)	宮崎丈二	八
四	趣味の巖島	五十嵐力	八
五	桃源郷伊豆の大島	有島生馬	九
六	夏の小暦	田山花袋	九
七	沙漠の花	吉江喬松	一〇
八	夏空を飛ぶその一	鈴木文史朗	一〇
九	夏空を飛ぶその二	鈴木文史朗	一一
	飛行機の話(自修文)		一一

一〇	富士の大観	大町桂月	一三
二	山上の花の草原(詩)	前田春聲	一三
三	偉人野口英世		一四
三	今	市島春城	一五
四	桃山御陵	田山花袋	一五
	ゆかしの杉(自修文)	幣原坦	一六
三	繪畫の感化	那珂通高	一六
六	明倫歌集より(短歌)		一七
七	田園雜興	大町桂月	一七
六	祖先を崇び家名を重んず		一八

Faint table of contents text, including chapter numbers and titles, mostly illegible due to fading.

帝國讀本 新制第二版 卷三

一 大日本國

御祖みおやの神の産ませし國に、
 皇孫すまみま降りて君とし知らず。
 寶祚は天地と窮りあらず。
 この國、この君世にたぐひなし。
 大君民を子のごとおぼし、
 國民君をば親とし慕ふ。
 さながら一家の睦はとはに。
 この國、この君世にたぐひなし。

御祖
皇孫
寶祚
窮り
たぐひなし
大君民
國民君
睦はとはに
たぐひなし

とは

しづめの山
神さぶ

國ぶり

大和の國のしづめの山と、
 富士の嶺み空に神さび立てり。
 貴き皇國の姿を見せて、
 高きはこの山世にたぐひなし。
 日出づる國のしるしの花と、
 櫻は霞にまがひて咲けり。
 氣高く雄々しき國ぶり見せて、
 にほふはこの花世にたぐひなし。

二 八雲立つ出雲

豊かな興趣

我が日本は最も美しい傳説に富んだ國である。随つてその上代史は、とても外の國には見られない豊かな興趣と、華やかな明るい色彩とを以て満されてゐる。私はいつもそれ等の古い物語を、曾て幼かつた頃母の懷に抱かれて、様々なお伽噺を聞かされてゐる時の様な和やかな懐かしさを以て、讀み耽るのである。

文化の進展

上代史に現れてゐる物語は、天上の神々の話と、地上の神の説話とに書分けられてゐる。天上の神々の話は、皇室の重要な史實を傳へてゐる點に於て尊重すべきものであるが、これに對して地上の神々の説話の中には、民族文化の進展に力を致した祖先日本人の雄大な理想と潑刺たる活動

神話

とが、神話の形を取つて美しく書現されてゐる。そしてそれ等の中では、出雲國に於ての物語が最も重要な位置を占めてゐて、古代日本の主流文化が、出雲を中心に漸次四方へ開けて行つた事を語つてゐる。かゝる文化開展の指導者として最も先に活躍されてゐるのは、天照大神の御弟たる素戔嗚尊である。八雲立つ出雲八重垣妻ごみに^(一)の歌を遣して、出雲といふ國名の起源を作られたのもこの尊であるが、なほ八岐大蛇を退治しては人民の害を除き、對岸の新羅から^(二)數の樹種を持還られては大規模の植林事業を經營されるなど、著大な功績を擧げてをられる。

次に素戔嗚尊の後裔としてその大業を繼がれたのは大

(一)「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」古事記

(二)古代朝鮮の國、三韓の一

後裔

國主命である。大國主命といふ神の名は稻羽の白兔の話で誰にも知られてゐるが、それよりもつと重要なのは少彦名命と協同してこの日本の國土を經營された物語である。

昔々大國主命が

(一)因幡國。

(二)神御產靈神の子。大國主命と共に出雲にをられて國土を經營された。



大國主命と少彦名命
(高橋廣湖筆)

を見廻されたが、何者の姿も見えない。これは不思議だと一層氣を附けて探し廻られると、みそさゞいの羽を著物に仕立てて著込んだ一人の小人が、草の實の殻の舟に乗つて、海

無省察

岸へ漕寄せて來るのが見えた。面白く思つて、掌の上に取上げて愛してをられると、急に跳り上つて大國主命のお顔に食附いた。これが即ち小彦名命で、後には立派な男となつて、大國主命と共に國土の經營に當られたといふこの話も、日本人の耳には餘りに熟し過ぎてゐるが、それだけに、唯一場のお伽噺として、無省察に聞捨てられてゐる。随つて、その話のうちに含まれてゐる大切な事からも、多くは氣附かれてをらない。

反映する

すべて古代の神話や傳説は、民族の理想及び事蹟を、それぞれ反映してゐるものであるが、我が國の出雲神話を注意してみると、素戔嗚尊や大國主命は、單に國內を善く治めて

文化施設

海流

諸種の文化施設をせられたばかりでなく、絶えず海外の諸國と交通して新文明を攝取し、別して朝鮮半島の國々とは、一家の様に相往來してをられた事が分るのである。地圖を披いて日本海、海流に目を注ぐと、一方樺太及び北海道の西偏を傳つて流れてゐる暖流は、朝鮮海峽から導かれ、他方朝鮮半島の東海岸に沿うて弧を描いてゐるリマン海流の線は、古代朝鮮の新羅と我が出雲國とを連ねてゐるのが見られるが、この海流の線は、同時にまた日鮮の間を繋ぐ文化線であつて、まるでその海流に乗りでもした様に、我が日本列島と朝鮮半島との間には頻繁に交通が行はれ、支那方面から來る大陸文明もまた、その路をたどつて絶えず流れ込

寒流である。
Tsiman.
間宮海峡を下の
西岸に日本海の
流し、時に朝鮮
鮮海峽を過ぎ
て黄海に向ふ
こともある。

出土物

んでをつたのである。近年頻りに朝鮮で發掘される古墳の出土物と、内地の古墳出土物とに少からぬ一致が認められるのは、何よりもよい證據であらう。上代郷土誌の一つである出雲風土記には、これまた素戔嗚尊の後裔八束水臣津野命みことといふ神が、出雲國の文化はまだ幼稚で、土地も甚だ狭いところが對岸の朝鮮半島にはまだ方々に大きな土地が餘つてゐると言つて、その餘つた土地を廣刃のすきで取分け、三つよりによつた太い綱を結び附けて、「國來、々々。えいや、えいや」と我が日本の國に引寄せ、これをそれと石見、出雲、但馬、丹波、越等の國々に縫合されたといふ有名な「國引」の話が載つてゐるが、これ等も無意味に聞過してはならぬ事から

すき(鋤)
よる(縫)

である。

かういふ風に、素戔嗚尊以來、その一系の出雲の神々は、何れも國土の經營に力を盡されたが、殊に雄大な理想を以てその事業を大成されたのは大國主命である。風土記の類にはこの神の事を特に國作大國主命と尊んで書いてあるが、實際その讚名たななの通り、當時の出雲政府の統治範圍は、今の中國地方は勿論のこと、東は遠く北陸地方に及び、なほその奥地にも延びてをつたらうと推測される。後に皇祖神の御使として武甕槌、經津主の二神が、この蘆原の中つ國は皇孫にお譲り申し上げる様にといふ神敕を傳へに來た時に、大國主命とその長子(一)事代主命とは、直ちに敕旨を畏んで了承さ

推測

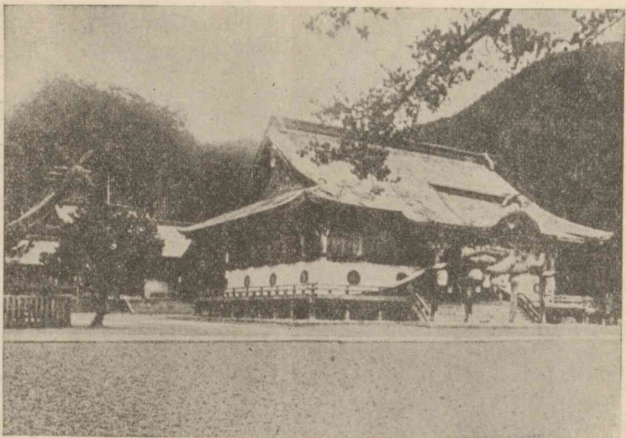
(一) 獵漁を好み、
父神を輔佐し
て出雲にをら
れた。
了承する

經營統治する

れたにも關らず、同じ御子の建御名方命は一旦これに反抗された爲、武甕槌神の勇力に迫られて、信濃國の諏訪地方に逃延び、遂に服従を誓つて諏訪の神となられたと傳へられてゐるが、この命が諏訪まで逃げられたといふ事は、大國主命の領土の極限を示してゐるものとも考へられる。これ程までの大領土を善く經營統治して、かの稻羽の白兔の話に現れてゐる如く、或は醫療の方法を教へ、少彦名命の話に見えてゐる様に、或は農耕法を改良する等内治に力を致し、一方では大陸方面と絶えず交渉して外國文化を吸収し、民族の發展と文化の進歩とを圖られた大國主命の神業は、實に偉大なものである。我々は神武天皇の御大業を讃へ奉る一

草昧時代

有終の美



面、この民族祖先神が、よく草昧時代の日本を開拓して、これを優秀な文化段階に導いた大偉業を讚歎すべきであるが、殊に有終の美を濟したのは、大國主命が多年の勞苦を重ねて經營されたその國土を、潔く皇孫の御統治に譲り奉つて、全日本を統一に置いた事で、この一舉があつた爲に、國內には永く平和が續き、萬世一系の皇室の治下に、特色ある日本民族の文化は目覺しい進展を遂げたのである。大國主命は今

頭宰者

跪拜

も官幣大社出雲大社の神と祭られて、八百萬神の頭宰者と尊まれてお出でになる。八雲立つ出雲の山々を背景に、神々しく建てられてゐる大社の神殿にうち向ふ者は、日本建國の準備時代を完成したこの祖先神の文化的偉蹟に對して、何人も心からの跪拜を捧ぐべきである。

三 春の一日

島崎藤村

今年の春は雨多く、ともすれば空曇りて、快晴と言ふべき日は少かりしを、珍しくも今日は雲收りて、空の色も眼に心地よし。かくて興も涌上り、足も浮立ちければ、友を誘ひて利根川のほとりに遊ぶ。

(一)詩人、小説家。名は春樹。明治五年長野縣に生れた。新詩集、飯倉村あり。著す。藤村全集に收められてゐる。
(二)群馬縣利根郡文殊山に總發の武藏、下總の界をなし、銚子に於て海關東第一の大

に注いでゐる。河。

酔ひしる
恍惚

幽懷を遣る

見るたび毎に新しきは、朽ちず盡きざる自然の様なりけり。殊に雨收りての後なれば、樹といふ樹、草といふ草、げに何れも綠美しき若葉を伸べて、活々と大氣を呼吸する様目に見ゆる心地す。花やかに射す日の光の麗しさよ。柔かに吹渡る春の風の爽かさよ。我は酔ひしれたるが如く、恍惚としてこの景色の中を行くに、松生茂れる小高き丘あり。友は此所に遊ぶ事を好みて、常に來りて幽懷を遣るとかや。右に左に眺め入るに、松が根に咲出でたる一もとの花あり。蘭かと思へば蘭にはあらで、あらゝぎの花なりけり。さるにても、その花の形の畫きたらんが如く、塵も据ゑざる風情の貴さよ。とて、友は花を愛づるの情に堪へてや、摘取りて黒き帽子に挿

みぬ。その花をかざして、微笑みて松蔭に立てる姿は、古への物語中の人物を目のあたり見る心地さへしたり。

我等はうち連れてこの丘を下りぬ。利根川のほとりに出づれば、楊柳の花咲満ちたり。高き岸に上りて眺むるに、遠き山々、近き村々、何れも一眸の裡に斂りて、携へ來りし雙眼鏡に入る桃の花の景色、えも言はず。

小貝川流れて利根に入るあたりは、左に戸田井の柳萌出でたるが見渡され、右には羽根野の漁家兩三軒岸に臨みて、物洗ふ女の様も情趣を添へたり。舟を浮べて、はえか釣らんと綸を垂れたる様、籠を背負ひ、たすきの目立ちたるを懸けたるが椿の花蔭を歌ひ行く様、煙草を吹かす農夫の心安き

（二）共に茨城縣
下總國北相
馬郡

はえ（鮑）

たすき（褌）

いなゝく
（嘶）



利根川（上原古年筆）

様、柳に繋がれたる馬のいなゝく様など、げに車東西に馳違ひ、煤煙暗く空を覆へる都の空と事かはり、かゝる田舎ならでは見らるまじき景色なり。我は友と共に此方の岸をさまよひ、彼方の堤を傳ひて、日一日、川のほとりに眺め暮しぬ。
馬を牽きすきを肩にして歸る農夫の後に附添ひ、眺め飽かぬ川のほとりをさまよひ歸るに、俄に鳴き出したる蛙の聲に誘はれて、友の指さす方を眺むれば、彼方に立てる野の家あり。藁ぶきの屋根は春の星を

帶びて、寂しき中にも深き趣を具へたるは、そもいかなる人の住めるにかあらん。

四 勿來の關 その一

岡本綺堂^(一)

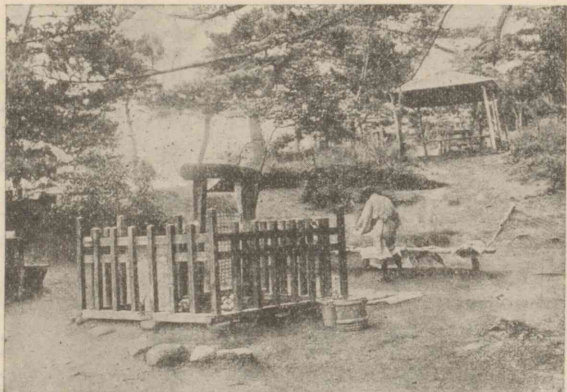
春の末、奥州^(二)勿來の關。

上のかたに寄せて、荒れたる關屋あり。關と言ふは名のみにて、今は著しく荒れたる様見ゆ。關屋に沿うて形ばかりの關の戸あり。正面より下のかたへかけては、砂白き濱邊にて、近く碧海を見る。關の戸に沿うて櫻の大樹あり。下のかたには磯馴松にまじりて櫻の立木あり。花は散りて雪の如くに敷けり。

(遠寺の鐘聞ゆ。八幡太郎義家は弓を持ちて馬に乗り、安倍宗任は口を取りて従ふ。續いて佐伯次郎經正、大原六太夫則明、伴七郎助兼、鎌倉權五郎景政、外に白旗を持ちたる軍兵等大勢従ふ。何れも後三年の役當時の武装なり。)

(一) 劇作家。名は五。東市治に生れた。東京に居り。著書は、物集、十番隨筆等あり。
(二) 天城縣(常陸國)と福島縣(磐城國)との境。
(三) 原頼義の子。天仁元年(一〇七〇年)六十八歳に歿す。
(四) 頼時の子。康平五年(一一〇一年)七歳に歿す。頼義と共に関原軍に戦ひ、敗れて僧となり、筑紫に住した。
(五) 清原武衡の家がこれ。源義家がこれより寛治元年(一一七一年)に至り、これを滅した。

宗任 關守やある八幡殿のお通りであるぞ。呼ぶ



勿來關址

翁

關の者一同御出迎を仕りまして御座ります。

(關守の翁、嫗、孫娘、わらべ等出で來りて迎へる。)

(義家は馬をおりて、家來に持たせたる床几にかゝる。家來どもはその左右に居並ぶ。)

義家 その昔、貞任征伐のみぎりにも、上り下りにこの關を越えたる

事あり。弓矢取る身の是非なさは、歌枕見る風流の旅にはあらで、物の具いかめしう身をかためて、再び陸奥へ向ふ

歌枕物の具

みぎり(砌)た。前九年の役を言ふ。安倍頼時、宗任の子貞任、宗任の亂を攻め、頼時を誅し、宗任を降らし、天喜四年(一一七四年)より康平四年(一一七三年)に至つた。

翁さぶ

のぢや。關守の翁は義家を見識つてをらうな。

翁 よう存じてをりまする。大將にはいつもお變りもあらせられず、憚ながらおめでたう存じ上げまする。

義家 翁も堅固で重疊ぢや。別れて年を経るまゝに、關屋の庇も荒果てて、關守の額も翁さびたわ。唯變らぬは關の戸の山櫻、昔ながらに咲きにほうてゐるなう。

翁 その櫻もこの頃は潮風が荒いので、年々に枯れるばかりで御座りまする。いや、かう申す翁も、姫も、潮風と年波とで、やがて枯れるかも知れませぬ。はゝゝゝ。

義家 姫もすこやかに見ゆるではないか。

姫 (進み出づ) はい、幸ひに達者に暮してをりまする。あの

時のいくさは九年も續いたとか承りましたが、今度もその様に續きませうか。

義家 それは義家にも分らぬが、敵は名に負ふ武衡家(一)衡ぢや、一年二年では濟むまいぞ。

翁 御苦勞お察し申し上げます。(二)義家の家來どもを見廻して、おゝ、どなたも皆逞しさうな方々のおそろひぢや。負けず劣らず功名をなされて、一日も早う凱陣なさるを祈つてをります。

經正 おゝ、よくぞ申してくれた。武衡家衡が奥州に威勢を振ひ、榮華に耽る身となりしは、父の勳功とは申しながら、一つには我が君の御恩であるぞ。

(一)鎮守府將軍清原武則の子、源義家と争ひて、源義家を助け、源義家を捕へた。時、源義家を斬ら治元、清原武貞の子、源義家を金澤に殺され、途中を逃された。

凱陣

廣言を吐く

則明 〇それを忘れて妄りに兵亂を起し、我が君より再三宥め申さるゝと雖も、ろくろくに御返事も仕らず、八幡太郎ならば相手に取つて不足はないなど、廣言を吐いてゐるとは憎き奴等ぢや。

助兼 我々これより攻下つて、片端より踏破り、源氏の武士の手並を見せてくるゝわ。

二の舞

景政 彼等がいかにばかりに狂ひ廻るとも、所詮は貞任の二の舞ぢや。

荒夷

嫗 おゝ、どなたも勇ましい事で御座ります。その貞任で思ひ出しましたが、先年貞任を攻めほろぼして都へ凱陣あそばす時に、熊の様な荒夷を生捕にしてお連れなさ

れましたが、あれはその後どうしましたな。

(家來どもは顔を見合せて、返事に困つてゐる。)

翁 さうぢや、あの熊の様な大男は、都大路を引廻されて、それから(一)鬼界ヶ島へでも流されたか、但しは(二)六條河原で獄門にでもかけられたか、何れそんな事で御座りませうな。

(家來どもは愈、返事に困る。馬の口を取りて、後の方に控へゐたる宗任はこの時進み出す。)

宗任 その熊の様な荒夷は即ちわしぢや。この宗任ぢや。

翁、嫗 え。

宗任 鬼界ヶ島へも流されず、六條河原へも晒されず、八幡殿の御家來に加へられて、今では然るべき武士となつたわ。

(一)今鹿兒島縣に屬する奄美諸島中の一。
(二)京都六條の賀茂河原。

(笑ふ)

翁 (氣の毒さうにいや、これはく。そのお人が其所にあるとは知らず、とんだ蔭口を申しました。どうぞ堪忍して下され。

姫 しかしまあ、そんな立派なお武士にならつしやれて、こんなめでたい事は御座りませぬ。

義家 我が思ふ事を憚なくいふ所に、質朴なる人情のしるばるゝものぢや。宗任必ず氣にさへまいぞ。

宗任 はあ。

義家 我々は暫く關屋の奥に參つて、あとなる人數の續くを待たん。翁案内してくりやれ。

翁 はあ。(起ちあがる。)さあ、かうお出でなされませ。

(翁は先に立ち、義家に續いて宗任は馬の口を取り、經正、則明、助兼、景政、その餘の軍兵等、何れも關屋の奥に入る。)

五 勿來の關 その二

(暫くして新羅三郎義光は武装して馬を早めて出づ。)

義光 關守はをらぬか。武者一騎うち通るぞ。(呼ぶ。)

(關守の翁出づ。)

義光 大將は何所におはす。都より新羅三郎が參りしと申し上げい。

翁 畏りました。(關屋に入る。)

(義光は鞍をおりて、樹に馬を繋ぐ。關屋のうちより義家は先に立ち、宗任は馬の口を取り、經正、則明、助兼、景政の四人従ひて出づ。)

(一)姓は源。頼義の子。寛治元年(一一七二)つた。清原武衡(一七七八)年(一七八七)歿。

義家 おゝ、義光か。

義光 兄上、お後を慕うて参りました。

義家 それ、敷皮を……。

則明は持つたる敷皮を義家に敷き、景政は同じ敷皮を義光に敷く。義家と義光とは相對して坐す。

義家 早速ながら、義光はいかにして此所まで参りしぞ。^(一) 匡

房卿のおとりなしにて、奥州下向を許されしか。

義光 (頭を振る) いかな、く。兄上の御意見にて一旦は思ひ

止りましたが、このたびの合戦は家の大事。いかに思ひ返しても、唯このまゝにはをられませぬ。たとひ後日にいかなるお咎めも受けなば受けよ、兄と生死を共にするが弟

(一)當時の學者。姓は大江。天永二年(一七〇一年)歿。

ふるまひ(振舞)

の道と胸を定め、恐多くも上より賜はりし左兵衛佐をうち捨てて、官も位もなき唯の新羅三郎義光と相成つて、兄上よりも三日遅れて京を立退き、夜を日について路次を急ぎ、唯今到着仕つて御座ります。御意見に背きし義光が自まゝのふるまひは、何とぞお赦し下さりませ。

義家 (涙を浮べる) 家においてこそ叱りもすれ。意見もすれ。兄の行末おぼつかなさには、おのが官位もうち捨てて、陸奥の果まで遙々慕ひ來りし弟を叱つて歸す兄があらうか。萬一後日にお咎めあらば、必ず義家が身に引受けて、その方に難儀はかけまいぞ。

宗任 (思はず叫ぶ) 殿、よくぞ言はれた。新羅殿もよくぞ参られ

た。それでこそ眞の兄弟で御座るわ。

義光 定めてお叱りもあらうかと、途々も案じてをりましたが、その御言葉を承つて、義光も安堵仕りました。(經正等に向いて)皆も聞け、義光は兄上のお許を受けて、今日よりその方どもと一緒に行くぞ。

(經正等は皆勇み立つ)

龍に雲
虎に翼

經正 思ひ掛なく新羅殿が參られたは、龍に雲と言はうか、虎に翼と申さうか。

則明 千騎萬騎の身方を得たるよりも、心強う存じまする。

助兼 これぞいくさに勝つべき前兆、

景政 誠におめでたう御座りまする。

義家 (勇んで)お、皆も喜べ、前の奥州征伐には義家は父子二人であつたが、今度も義家は一人でない。兄弟二人が駒を並べて、昔の戰場に再び立たうわ。いざ、うち連れて關を越えん。宗任、馬引け。

(起ちあがる)

宗任 あいや暫く。今この際に宗任少しくお願いが御座りまする。

義家 あらためて願とは。

宗任 此所は陸奥と常陸との國境、これまでお送り申し上げたれば、何とぞ某にお暇下し置かるゝ様、願ひ申し上げまする。

國破れて山河あり

義光 宗任は陸奥へなぜ向はぬ。

宗任 (慨然として) 陸奥は宗任の故郷、安倍の一族が滅び盡したる故郷で御座ります。國破れて山河あり。宗任徒に生きながらへて、故郷の山や河を見るに忍びませぬ。

義家 さらばこのまゝ都へ歸るか。

宗任 いや、再び都へ歸る心は御座りませぬ。宗任、日本の北の果に生まれましたれば、更に南の果の九州へ渡つて、新しき天地を拓かうと存じます。

義光 その方は都を見限つたとみゆるな。

宗任 思の外で御座りました。

義家 よい。この上は、その方の心まかせぢや。義家とは

違うて自由の身の上、行きたい所へ飛んで行け。

宗任 はあ、有難う御座ります。經

正等に) 方々お聞きの通りぢや。

經正 残念ながら是非に及ばぬ。

明則 此所でお別れ申すと致さう。

助兼 道中無事を、

來四人 祈り申すぞ。

關宗任 さらば殿。(會釋す)

義家 堅固で暮せ。

(義家と義光とは馬に乗る。則明と景

政とはその馬の口を取る。風の音して、櫻の花は雪の如くに散る。關守の翁出づ。)



(一)千載集卷二春歌下

翁 おゝ、またしても花が散る。方々の鎧の袖に雪の様に降りかゝりまするわ。

義家(馬上にて考へる。)

吹く風をなこそその關とおもへども

みちもせに散る山ざくらかな

宗任 その櫻花のちりどくに、我は南へ。

義家 我は北へ。

義光 思ひどくに別れて行くか。

義家 さらば宗任。

義光 無事を祈るぞ。

宗任 はあ、お別れ申しまする。

(宗任は一禮して向ふへ歩み去る。義家と義光とは手綱を繰りながらあとを見送る。櫻の花頻りに散りかゝる。幕——綺堂戯曲集——)

六 お遍路さん

(一) 萩原井泉水

りん／＼といふさえた音が、遙かの山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。——「お遍路さん」とは、何といふ親しみ深い言葉だらう。——四國八十八箇所^(一)に遺された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのがお遍路さんである。しかし、いかに信仰の爲とは言へ、四國を一巡する事は、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵の事ではないので、四國の代りにこの

(一)伊人。名は藤吉。明治十七年東京市に生れた。都府巡禮、京洛小品、芭蕉風景、山川行住等の著ある。外に句集がある。

さえる(牙)山莊

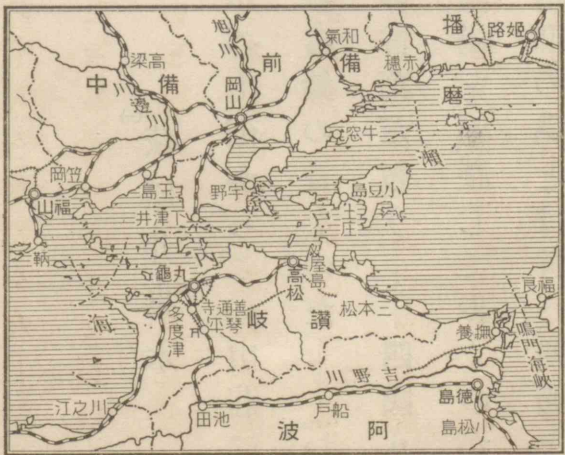
(二)平安時代の高僧。名は空海。讃岐の人。承和二年(一四九五年)寂。喜六十二(一四二一年)延喜二十一年(一八八一年)弘法大師の諡號を賜はつた。遍歴する

(一)香川縣大川郡大串崎の北方海中にある。功德

(二)岡山縣(備前國)岡山市
(三)香川縣高松市
(四)小豆島第一の町。

からげる(紫)

小豆島(せうとうしま)にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積得る事とされてゐる。島四國と言ふ言葉も出来てゐる。島四國の通路にしても、女の脚では六七日かゝるといふ事である。多くは岡山から、若しくは高松から、來るお遍路さんは、船で土庄港(つちのしま)に著く。其所から發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路をたどるのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を弔して、



先達



塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、寂しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀の様な海の光を浴びながら、海の近い麥畑の中の路をたどつて行く。それは繪である。美しい事である。この山莊にまで聞えるりんくといふさえた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。
お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩くのに好い氣持であり、また農事

教門

扶助

も比較的閑な四月頃に一番多く見受けるといふことだ。この頃島に著く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して来る。一體遍路といふものは、いつ頃から始つたものか知らないが、大師の教門を弘くする上から言つても、各自の信念を厚くする上から言つても、誠に好い事だと思ふ。そればかりではない。お遍路さんは到る所で愛せられる。また恵まれる。お遍路さん同志もまたお互に遍路であるといふ事の爲に信頼する。また扶助する。これが實に好い事だと思ふ。未知の人たちが連になつて親しんで行く。路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しない

扶助
信仰
路傍
遍路
荷物
紛失
莫識

眞實の道

讚仰する

欺瞞

といふ事だ。これは遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識から来るのだ。この道に參するに、知識も、修養も、資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも、娘でも、男でも、子供でも、唯一つの道を信ずる事によつて、この尊い心持に一致する事が出来るのだ。南無大師遍照金剛と讚仰する聲が出て来るのだ。これは實に美しい事だ。争鬭と欺瞞との満ちた社會の裡にあつて、信頼と扶助とに心を合せて行くくらゐ、美しい事が他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。

暗示

そしてこれは獨りお遍路さんの上の事だけではない。私
 たちは皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならない
 物を負うて、自分の名前を書いた札を撒散しながら、自分自
 分の道を遍歴してゐるのである。しかも私たちの周圍には、
 このお遍路さんに見る様な信頼と扶助とが行はれてゐる
 だらうか。私は思ふ、私たちはこのお遍路さんに學ばねばな
 らない。遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じな
 ければならない。そしてたとひ人間の悉くがお遍路さんの
 心を心としないまでも、私たちは先づ彼等の信と愛とを以
 て人生を歩きたいものである。

—山水巡禮—

七 暮春の野

徳富健次郎

青葉茂りて村々緑に埋れ、蘆伸びて川狭うなりぬ。

川の上流に立ちて村の彼方に沈む日を見る。日は已に小

坪の山にかゝりて、山は青黒き村の梢に

絶えくゞの紫を見せたり。潮次第に満ち

て川逆に流れ、一川の泡、雪の浮める如く、

青蘆の影を掠めて遡り行く。彼方の岸に

四つ手網あり。人は青蘆に隠れて見えねど、その四つ手を引

上ぐる毎に、網は夕日を帯びて紫金色に閃き、玉の如き水た

らたらと川に滴る。

やがて日は紅の球を揺がして山に落ちぬ。残照林端の空

小説家。蘆花
 と號した。熊
 本縣の人。昭
 和二年。自然
 六十年。不
 人生。如
 思ひ出の記
 寄生木のこ
 ずのたは日
 日本から日
 へ等の著ら
 り全集に収
 花全集に収
 られてゐる。
 (一)神奈川県
 相模國三浦郡
 逗子町の字。



徳富健次郎

残照

を紅に抹し、水にもその色流れつ。潮は愈、川に満ち、残照を浮べ、青蘆の影を載せ、白き泡を運び、紺色の林影を浸して、漫々として將に小板橋を浸さんとす。時々魚あり、林影の中にはねて、紺青の水に白き渦紋を涌かしぬ。

杳々

夕風そよ吹き、残照の影も次第に薄うなりぬ。蘆は影と一つになり、そよ〜歌ひながら暮行く。いづこの寺の鐘か、杳杳として野末を渡る。

やがて地は青黒う暮れ、人家の障子に燈火紅に見えそめぬ。

—自然と人生—

八 喬 木

萬造寺 齊(一)

(一)小説家、詩人。明治十九年鹿兒島縣に生れた。

日光の驟雨

見よ、すばらしい榎の喬木、
高く、美しく、堂々と
まばゆい日光の驟雨を浴み、
新生の悦に身ふるひしつゝ、
五月の空に聳え立つ。
彼の姿は地球の胸より
空へ奔騰する大噴水、
天蓋の如く緑の珠玉
珊々として滴り落ちる。
彼の姿を望む時
私は偉人の生涯を思ふ。
一つの民族の母胎より生れ、

體現する

君臨する

星霜

その民族の過去の努力のすべての成果を攝取しつゝ、
その民族の憧憬と、理想と、欲求と、苦惱とをおのれの一身
に體現しつゝ、

時代を指導する偉人の如く、

豊饒な土壤の母胎より、

深い自然の根源より、

絶えず榮養を吸収して

鬱蒼と繁茂しつゝ、

高く、美しく、堂々と

彼は五月の野に君臨する。

見よ、彼の節こぶだらけの幹のおもてに

深く刻まれた幾星霜の奮闘と、努力と、忍苦との痕跡を。

進展の一路を
たどる

しかもあらゆる困難を排し、
すべての障碍にうち克ちつゝ、

成長の力を失ふことなく

絶えず更新し脱落して、

無限な進展の一路をたどる

彼の姿の端麗さ。

彼の力の旺盛さ。

彼は大地を裝飾するもの

彼は世界を莊嚴するもの。

まことに彼は試鍊と苦惱との闇の中より

希望と光明とを生出すもの。

努力と精進との不撓の精神。

おのれの性を盡して生きつゝ、

うから

従容として天命を待つ
かの曠世の偉人のうからだ。

私は聞いた、冬の眞夜中
膚をつんざく烈風の激しい突撃に對抗する彼の勇まし

い怒號の聲を。

私は見た、雪の日の午後

降積む雪の重壓を昂然として反撥しつゝ空にそば立つ

彼の姿を。

あゝ、傷ましい迫害と孤獨と敵意との中にあつて、

(さうしてそれがすべての偉人の運命なのだ)

雪を凌ぎ、嵐と戦ひ、

長い血みどろの奮闘の後

再び楽しい五月を迎へた

彼の緑のみづ／＼しさ。

彼の勝利の華々しさ。

彼の榮光の輝かしさ。

彼によつて五月は楽しく、

世界は希望と光明とに充ちる。

彼の梢の不斷のそよぎは

疲れたものへの慰藉の言葉、

鼓舞と激励との音楽だ。

悩めるものは此所に來つて

彼の下蔭に休むがよい、

彼の言葉をきくがよい、

彼のいのちに觸れるがよい、

見よ、すばらしい榎の喬木、
高く、美しく、堂々と、
傾く午後の日ざしの中に
今燦爛と光り輝く。

自修文

山四題

足立源一郎

山入りの朝程快いものはない。始めての山なら更に一入だが、
幾たびか通り馴れた登路であつても、山の氣がしみくと身に
しむ様な新鮮さを覚える。殊に麓の村が新緑にきほひたつ初夏
の山入りには、一段と心をときめかす色があり、薫がある。
漸く手入れされたばかりの用水路に爽かなせゝらぎを立て
て勢よく流れる水は、氷の様に冷たく齒にしみて、使ひ馴れた齒

(一)洋畫家。明治
二十二年大阪
市に生れた。

きほひたつ
勇みたつ。
心をときめか
す。
心を興奮させ
る。

緑金
金色を帯びた
緑色。

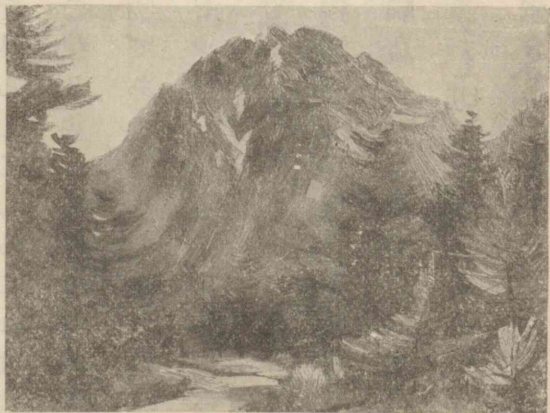
砂子
金や銀の箔を
の粉末にしたも
の。
雪解水
雪のとけた水。

澤路
山の峠と峠と
の間の窪地に
通ぜられた路。

磨さへ、何か別な香と味とがある様に思へる。本當に目覚める様
な心持とはこんなものであらうと思ふ。

落葉松の芽は緑金の湯氣が立つ
様に軟かく、白樺の若葉は紺紙にま
かれた砂子の様に大空に細かく微
動する。雪解水をたつぷりと含んだ
落葉の路は靴ざはりも軟かく、見上
げる峯の片側はまだべつとりと一
面の雪だ。まだ踏み跡の少い澤路に
は、思ひがけぬ大きな流木がかゝつ
てゐたり、雪崩れのあとの押出しが
所々にあつて邪魔したりする。

やう／＼登るにつれて、雪に押された梢にほのかな紅を帯び



(筆郎一源立足) 月五の地高上——松葉落

(一) シュタイクア
イゼン (Stein-
Eisen) の略。
靴の爲の金が
べんじき。か
たは踏みこま
だりし下に様
にだりし下に
つけるもの。
(二) 燕雀類の鳥
雀より大形で
嘴長く腹部は
く背、頭部は
かば色。鳴く
聲がかはいく
足場 (step)。



(筆郎一源立足) 夏初原瀬尾——ばか白

ながら、まだ起上らないたけかばが眼につく。日當りのよい澤沿
ひの斜面には、すくくと伸びた山獨活が鮮かな緑に輝いて、高
い香氣を漲らしてゐる。これは根ま
がり笹の芽と共に、山の泊りの食慾
を誘ふ物である。よくしまつた雪面
にアイゼンをくひ込ませながら小
刻みに登る男の背に、ゆらゆらと揺
れる山獨活の緑が眼にしみる。朗か
に高く駒鳥の啼く音が谷を渡る。
(三) ステップも切れない程凍りついた
日蔭を過ぎると、またさくくと雪
を踏む足音が静かに續く。立ちどまると、脚もとに遠く流れ行く
水の音が聞える。ぱつくりと開いた雪の切目からのぞくと、其所

に小さな瀧をなして雪解の水がほとばしつてゐる。初夏の山入
りはたまらなく朗かだ。



(筆郎一源立足) 溪雪の後雨——ばかけた

霧に明け、雨に暮れる。
屋根が飛ぶかと思はれる程、吹荒
れた夜半の風が止んで、また霧に明
け、雨に暮れる。
かうした日が三日も四日も續く
事がある。僅かな明取の窓は全部閉
ぢられて、ほの暗い小舎の内には、ど
こからともなく吹込む霧が漂ひ、す
べての物はぬれ靴の様に湿つぽく冷たくなつてしまふ。新しい
登山者は登つて來ず、日程を限られた者は窮屈な雨具に身を固

濛々
霧または雨で
薄暗くぼんや
りとしてゐる
さま。

くさりきる
弱つて気がめ
いること。
所在なく
退屈さうに。

砂礫
すなやこいし。

Isolat-sack.
身の中に入れ
て寒さを防
ぎ、寝る事が
出来る様にな
つてゐる袋。

無爲無碍な心
境
何も爲さず、
また何物から
もさまたげら
れない心の境
地。
人の心を自然
へと云々
もとく自然
界から出た人
間の心を、再
び自然界の中
に誘ひ入れる
と言ふので、
人の心を自然
の中に浸らせ
てしまふ事を
言つたもの。
喧噪
かしましく、
さわがしいこ
と。

めて、元氣なくおりて行く。そのたびに濛々とたちこめた戸外の霧雨が、冷たい風と一緒にさつと流れ込む。

何故こんなに降るのだらうと、すつかりくさりきつた顔を所在なく舉げると、黒く燻つた天井の所々に、明るい點々の散在するのを發見する。ばら／＼つと砂礫を吹附ける音がして、天井の明るい點からぼたぼたとしづくが垂れる。吹返された爐の煙が大きく輪を描いてから全體に廣がつて、段々薄く消えて行く。爐端にのべた防水のシニラーフザックの中だけが唯一の安全地帯で、



(筆郎一源立足) 雪 殘 の 馬 白

また常に快適な暖かさを保つてくれる場所なのだ。頸のあたりで締めた袋の中に入つて、唯じつと寝て暮す幾日かの單調な生活、ごーつと鳴り渡る風の音を追ひながら、風向や風速を想像する外には、完全に無爲無碍な心境其所に始めて原始の日の清澄さを覚え、悠久な自然への親しみを感ずる。雨の山嶽のわびしさは、人の心を自然へと呼返す大きな力である。

この閑寂にして清朗な境地は、雨の山小舎に降込められた者のみが味はひ得る妙味ではなからうか。

一しきり喧噪を極めた山小舎も、八月の半ばになると、深溪の残雪と共に、山の群衆はいつとなく影を潜め、澤近い水に恵まれた小舎では、毎日さゝやかながら風呂がたつ様になる。訪れる登山者も、休暇初めの群衆と違つて、いかにも山に親しみ、山を愛し、

(rucksack) 登山者や旅行者の用ひる背負袋。

山の懐にいつくしまれに來た様な、山馴れのした人が多くなる。づゝしりと目のかゝつたリュックサックをおろすと、またお世話になりますよ。」と爐端の主人に聲をかける。それを受ける主人の顔が、また堪らなく懐かしげに見え、おぼろげに顔だけ見覚えのある様な人々が、どこでしたかね、山でお逢ひした様に思ひます。」と語り合ふのも、かうした靜かな山小舎である。極めて稀に、豫期しない人々がめぐり逢うて、山旅の思出に花を咲かせ、しめやかな爐邊に夜を更す。そして乳色の朝霧が卷上げる乗越して、御機嫌よう。」と一言を残して別れてしまふ。平常は考へてもみないさうした山の知人ちびとを懐かしむのも山小舎である。

「この前此所こゝで一緒にお泊りになつた神戸のSさんが、二三日前に來ましたよ。そしてやはり山歩きをしてゐるか、と、あなたの事を尋ねてゐました。」そんな事を聞いて、三年も前の山旅を思ひ

乗越し 尾根をこちら側から向側へ越す所

出し、山の便りを書送る様な事もある。

山で逢つて山で忘れて行く、其所に山の知人の懐かしさがある。

山麓の村々に祭の大幟おほのぼが立並ぶ様になると、今までは時を超した様に落著いてゐた小舎の主人も急に里心さとこころを起して、あと幾日と、下山の日を待つ様になる。もう食糧の補給も絶えて、灰にまみれながら(1)レットルの色もあせた棚の罐詰を切つたり、わなにかけた山兎と僅かな味噌とを唯一つの珍味として、ひたすらに下山の準備を急ぐ。

九月に入れば山は既に秋だ。三日に一度は冷たい雨が霧に誘はれて訪れるし、一雨毎に空は目立つて黄ばみ、高く澄渡る。か弱い兎草は一夜の嵐に薙倒され、千島桔梗は岩蔭に震へてゐる。

里心 此所は里に歸りたい心

(1) 英語 label の 轉訛。商品に貼る紙札。

(一) 詩人、評論家。名は昌治。明治十九年新潟縣に生れた。良寛坊語、一茶と良寛語、芭蕉と真心と、千代と連月、郷土に語る等の著がある。

古刹

(二) 第八代後水尾天皇の御代。二二七四年棟梁

九 佛の化身

(一) 相馬御風

私は先頃一つのいゝ傳説を聞いた。それは越後の北蒲原郡の乙村きのとむらにある乙寶寺おつほうじといふ古刹に參詣した時であつた。その寺には有名な大日如來を安置した大日堂がある。その境内に、先年國寶建造物として指定された、たまらなくいゝ形をした三重塔がある。かの傳説はその三重塔の建立に關して、語り傳へられたものである。

その三重塔の建立は慶長十九年五月で、棟梁は京都の住人小島吉正である。その塔の建築には、流石に有名なその棟梁も、心を痛め盡したと言はれてゐる。どう工夫してみても、

うまくゆかなかつた。とうとう彼は、工事半ばに、絶望の極、夜逃をしてしまつた。どこへといふあてもなかつたが、彼は唯



乙寶寺三重塔

姿を晦しさへすればよかつたのだ。

彼は眞暗な夜路をたどつて、海岸へと出た。そして海岸に沿うて西へ西へと歩みを運んだ。眞

暗な砂濱に打寄せる浪の音は、時にはこの世に望を失つた彼を誘ふ様にも思はれた。いつそあの暗い波間に飛込んでしまはうかといふ様な突詰めた思も、幾たびとなく彼を襲

つた。しかし、彼はやはり死ねなかつた。彼は唯むちやくちやに闇の中を歩くのみであつた。

自分の生命を打込んで工事を進めて來たあの三重塔の失敗は、苟も藝術を自己の生命とする彼に取つては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外ならなかつた。しかも、彼はなぜかうしてその場を逃出して來たか。それを反省する時、彼は我ながらその卑怯を詛はずにはゐられなかつた。自己に對する詛は、やがて自己に對する憎しみであつた。けれども彼はその詛ふべき自己、憎むべき自己を闇の波底に葬つてしまふべく、なほ其所に故知れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾した心の苦しみは、唯徒に彼の心を狂はせ亂れさせるばかりであつた。今の彼の歩みは全く狂へる者の歩みに外ならなかつた。

黎明

彼の心は底知れず暗かつた。しかし、天地の闇はいつとなしにほの／＼として、黎明の光に照され始めた。ほのかに明るみかけた大海の面では、先づ波の穂の白いのが朝の光を受けた。やがて彼の前には、果しもなげに續いた廣い砂濱が見えて來た。光は刻一刻と土地の明るさを増して行つた。明離れて行く海には、光を歡ぶが如く波が小躍してゐた。波間に浮いてゐた鷗の胸は、銀色に輝いた。夜露にしつとりとぬれた砂濱に長く／＼續いた彼の足跡、むちやくちやに闇の中を歩いて來た彼自らの足跡——それさへも、今は朝の光

に照されて、一條の長い路となつて現れた。

さうした朗かな黎明の大地の上に立つた彼は、今は何もかもすつかり忘れ果てて、唯茫然とその美に酔うた。そして倒れる様に、彼は大地の上へ全身を投出したのであつた。

それから幾時過ぎたか分らなかつたが、夢とも現ともなく、彼は耳もと近くに子供たちの楽しさうな笑聲を聞いた。永い眠から覺めた様に、彼はふらふらと起上つた。と、朦朧とした彼の眼の前に、三人の子供が砂上に坐つて、何か頻りにやつてゐるのが現れた。何と言ふ譯もなしに、彼はその方へ吸寄せられた。しかし、子供たちは遊に夢中になつてゐるのか、彼の近寄つた事に少しも氣附かなかつた。がその刹那、こ

の哀れな建築師の疲れ果てた兩眼には、突如として不可思議な輝きが現れた。死んだ様になつてゐた彼の全身には、不思議な生氣が充ち溢れた。

三人の子供は石を澤山拾ひ集めて來て、それを積重ね積重ねして、塔の様な物を造らうとしてゐるのであつた。彼等は今やすべてを忘れて、その事に全心を打込んでゐる。甲が一つの石を置くと、乙は次に他の一つの石を積む。更に丙がそれに一石を重ねる。代る／＼彼等はそれを續けて、著々として或一つの形を組立てつゝあるが、なか／＼うまくゆかない。積むと崩れる。崩れるとまた積始める。幾たびとなく失敗し、幾たびとなく始める。しかも彼等は失望しない。倦まな

い。止めない。そして遂に或一つの纏つた形が出来上る。すると、彼等は共に手を拍ち、聲を舉げて喜ぶ。そして更にそれを崩して、また新たに始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に飽かず眺め入つてゐたかの絶望の建築師は、或瞬間に至つて、貴い何物かを獲得した様な確信に輝く面もちを以て叫んだ、

「そこだ。その呼吸だ。その組み方だ。」

そしてさう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと来た路へと駈戻つた。

さうした事があつて、漸くの事で出来上つたのが、今日見るが如き端巖微妙な姿をもつた乙寶寺の三重塔である。

端巖

化身

Blaise Pascal
フランスの數學者、物理學者、哲學者。
（西紀一六六二年）

附會

權化

言ふのが傳説のあらましである。しかも、傳説はそれに附加へて、その三人の子供は大日堂の大日、藥師、彌陀の化身であつたと言ふのである。

「智慧は私たちを子供にかへす」とパスカルは言つた。私たちは更に「子供は私たちを本當の智慧に導く」とも言ひ得よう。乙寶寺三重塔の傳説は、私にさうした貴い暗示を與へる。「子供は佛の化身であつた」と言ふその傳説の附會をも、私はそのまゝ、受容れるに躊躇しない。さうだ、すべての幼兒は神の權化であり、佛の化身である。

(一)江戸時代の儒者。大和國郡山藩の重臣。名は里恭。一曆八年(二一八)年(一八五三)歿。四寶年五十三。著ある。律儀

一〇 師の恩

(一) 柳澤淇園

江戸下谷高岸寺といふに、いつの頃にか弟子の僧二人ありけるが、一人は身持律儀にして、常々寺の爲ともなるべき事のみ心盡せど、一人の僧は戒行をも保たて大酒を好み、いさかひなどして、萬づ私多かりしが、或時什物を取出し、賣るを、一人の僧見て諫を加へけれども、聞入れざりければ、この由を住持に告げ、かの僧追出し給はずば、寺の爲にもなるべからず」と言ふに、住持は「ひとまづ諭し見るべし」とて、嚴しく戒めたるまゝにて捨置きぬ。また或時佛具を取出して賣りたるを聞きて、一人の僧また住持が許に行きて、「悪僧

住持
什物
戒行
律儀

えこ(依怙)

このたびは佛具を盗み出し賣りたり。我等諫めたりとて更に用ふる所もなく、住持も捨置き給へば、是非に及ばず。我は行く／＼禍の寺に及びて、身にもかゝらん事を恐れ思へり。若し彼を追出し給はずば、我に暇を賜はるべし」と言ふに、住持は涙を浮べ、「さあらば、願のまゝにその方に暇をつかはすべし。悪僧は今暫し我が傍に置きて、追々諭すべし」と言ふに、この僧大いに住持を怨み、「我等暇を乞はさ、悪僧を追出し給はんと思ふものから、それを却りて罪なき我等に暇賜はること、近頃えこの心にあらずや」と言へば、住持答へて、「さにあらず。御身は今我が寺を出でたりとも、何所へ行きてもはや僧一人の勤はなる者なり。悪僧は今我が傍を離れなば、忽ち

捕はれて罪人とならんも測り難し。さすれば我が徳もすたれて、一人の弟子を失ふなり。故に今暫しは傍に置いて、彼が命をも延し、且は嚴しく教誡をもせば、善心に立返る事もあるべし。それを樂しみに我が傍を放つ事をせざるなり。」と言へば、この由を聞きて、惡僧も師の高恩に感じ、やがて善心に返りきとぞ。

— 雲萍雜志 —

一一 桶狹間の戦その一 遠山信春

織田上總介信長公(一)清洲の城に御座ありけるが、近日鳴海(二)に出向ひて無二に今川と一戦を遂ぐべし。」と仰せらる林佐渡守等、敵は四萬に及ぶ大軍なり。身方三千の御人數にて、平

(一)傳不詳。總見記の外、織田軍記、島原合戦記等の著がある。
(二)尾張國(愛知縣)西春日井郡清洲町。
(三)同愛知郡。
(四)今川義元。
(五)林通勝。

對揚す

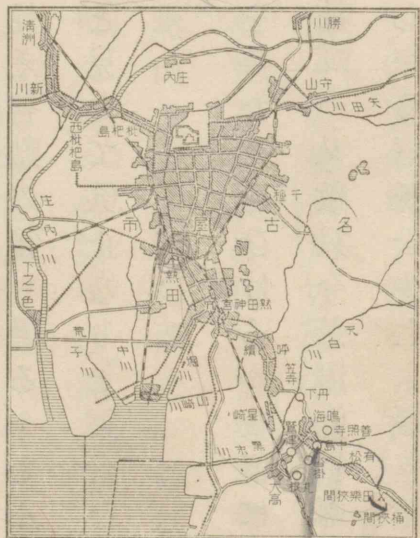
切所

承引

(一)永祿三年(二二〇年)。
(二)知多郡。桶狹間の西北約六キロメートル。
(三)知多郡。
(四)佐久間盛重。

場の御合戦對揚すべき事にあらず。唯この城に立籠らせ給ひて、敵を切所に引受けて戦はせられ候べし。」と諫め申し上げけれども、この儀少しも御承引なし。

さる程に五月十八日の夜に入りて、敵はや大高に參著せし由、丸根の城佐久間方より脚力を馳せて申



し上げけり。信長公諸家老を集められしに、軍の評定はこれなくして、唯世上の御雜談にて、御酒宴に及ぶ。宮福大夫といふ猿樂、羅城門の曲舞をなし、兵の交り、頼ある中の酒宴かな。

猿樂

したく(支度)
つぶやく
(咳)
智慧の鏡も曇る

と謠ひければ、殊の外の御感ありて、黄金を下され、既に夜も深更に及べり。各宿所に歸りて、したくあるべし。とて出されけり。家老の面々歸りながら、つぶやくけるは、「日頃は良き大將なれども、御運の末と相見え、智慧の鏡も曇るやらん、さしたる軍の御工夫も出でぬと見えて笑止なり。」と言合ひて歸りけり。

(一)知多郡鷺津町。注進

かくてその夜の明くるを待たせ給ひけるが、夜既に明方の事なるに、鷺津の城より注進あり、「敵只今鷺津、丸根兩城へ人數を取掛け候」と追々申し來る。信長公少しも騒ぎ給はず、「敦盛」の舞の「人間五十年、下天の内を比ぶれば、夢幻の如くなり。一たび生を享け、滅せぬ者のあるべきか。」といふ所を繰返

(一)今名古屋市の内。
(二)名古屋市の南區。官幣大社熱田神宮。

し舞はせ給ひて、「さらば螺を吹立て、具足おこせよ。」と仰せられければ、小姓衆乃ち御鎧を奉る。靜かに御物の具を召固め、立ちながら御食を三杯參り、御兜の緒を締められ、太く逞しき栗毛の駒に召されつゝ、閑々と御出馬なり。御供の小姓衆、御寵愛の岩室長門守を始め、長谷川橋介、山口飛驒守等、主従六騎、その外雜兵二百餘人、熱田まで三里の間を一時に駈附けらる。熱田大明神の旗屋口に著かせ給へば、諸勢方々より馳參じて、はや千騎許になりぬ。乃ち當社大明神へ御參詣ありて、合戦の勝利の御祈願を掛けられ、一通の願書を籠めさせ、やがて社頭より御旗を進め給へば、白鷺二つ御旗の先に飛行くを、あれこそ當社大明神の擁護し給ふ驗よ。とて、諸勢

(一)熱田神宮の門前。俗に智慧の文殊と言ふ。

辰の刻

(二)愛知郡呼続の南。

揉みに揉む

(三)知多郡有松町。

披露

をいさめて進まれけり。

源大夫の宮の前より東を御覽するに、丸根山、鷲津山兩城共に落城と見え、黒煙雲に連なりて夥しければ、少しも早く駈附けたく思し召す。濱手よりは近路なるに、それさへ今朝は満潮差入りて、馬の通ひもかなひ難し。その日の辰の刻に、やう／＼熱田より笠寺(二)の東、上道の細繩手を、揉みに揉んで駈けさせられ、道々の砦の人數を召集め、やがて善照寺(三)の東の狭間にて勢ぞろひありけるに、漸く三千許なりけれども、五千の人數とぞ披露ありける。

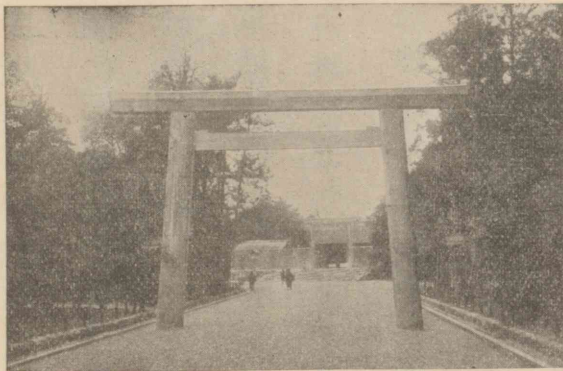
さて信長公御軍謀には、敵の先手の大軍を皆本道へ遣過して、當方の人數は密かに山の陰を廻り行きて、義元の本陣

へ一度にどつと突掛り、切崩さんとの結構なり。義元(一)を

(一)知多郡有松町に屬する。勝敗を決したの地である。田樂山、三方丘陵を以て圍まれた窪

(二)佐々政次。成政の兄。

(三)千秋秀忠。



熱田神宮

ば知らず、桶狭間の山下の芝原に敷皮敷かせ、先手の者どもが鷲津、丸根の兩城を攻落せしを、大いに悦び勇み誇りける所へ、近郷の寺社の僧、社人等、悦の樽を進上しければ、乃ちそれにて酒宴を始め、謠をうたひ興に入る。熱田表には織田方の先陣(二)、信

長公の御旗を待受け、山際に控へゐたる駿河勢へ打つて掛る。佐々、千秋小勢なれば取圍まれて、五十餘人討取られ、駿河

とき(関)

勢誇りて、隼人、四郎兩將の首を取りて槍の先に差上げて、一度にどつとときを作る。しかのみならず、信長公の寵臣岩室長門守も拔駈して討取られぬ。佐々、千秋、岩室三人の首を本陣に遣し、義元に見せ奉れば、義元愈、勇み誇りて、「某が鋒先には、いかなる天魔波旬なりともたまるまじ」と宣ひて、なほ勝軍に驕を極め、酒宴に耽りてゐ給ひけり。

天魔波旬

一二 桶狭間の戦 その二

さても信長公は、これより中島に移りて合戦を始めんと宣ひければ、人々大將の謀を知らず、池田勝三郎、毛利新助、林佐渡守、柴田權六等御くつわに取附きて、「此所は兩方深田の

(一)桶狭間の西北
(二)池田信輝、輝政の父
(三)毛利秀高
(四)柴田勝家
くつわ(轡)

勿體なし

無理無體

うち、一騎打の細路なり。これを通り過ぎ給はゞ、無勢の様體敵方より定かに見透し侍るべし。その上、勝を焦りて、威勢強き敵の中へこの小勢にて向はれんこと、勿體なき次第なり。唯切所に待受けて御合戦候べし」と、各諫言申しけれども、無理無體に振切つて、中島に移らせ給ひ、中島よりまた討出でんとし給ふを、なほもかの面々聲々に止め申しけり。その時信長公人々を顧て、「凡そ合戦の習は、勢の多少によるべからず。殊更この敵は、昨日は大高城へ兵糧を入れ、また今朝は鷺津、丸根兩城の合戦に精を盡し、辛苦艱難して、疲れ果てたる人數なれば、大勢と言ふとも猛からず。此方は新手にて、思ひ切りたる軍兵なり。敵の思ひも寄らぬ所へ、無二に

新手

思ひ切る

下知す

掛つて突崩さば、などか勝利を得ざるべき」と、大音聲に下知し給へば、一同げにもと安堵しけり。

さて、今日の合戦は首取るべからず、打捨なるべし。この軍場へ出づる者は、家の面目、末代の高名たるべし」とて、諸勢をいさめて掛り給ふに、先驅の前田(一)犬千代生年十八歳、毛利河内、森十助、木下雅樂助、中河金右衛門、佐久間彌太郎、森小助、安倉彌太郎、魚住隼人等、高名して、手にく首を持來る。信長公御感ありて、皆々旗を卷き、忍びやかに山際まで押附け、敵勢の後の山を押廻つて、義元が本陣に討つて掛れ」と下知し給ふ。築田出羽守(二)申し上ぐるは、敵は今朝鷺津、丸根兩城を攻めしより、未だ備を變ふべからず。この分にて掛り給はば、敵の

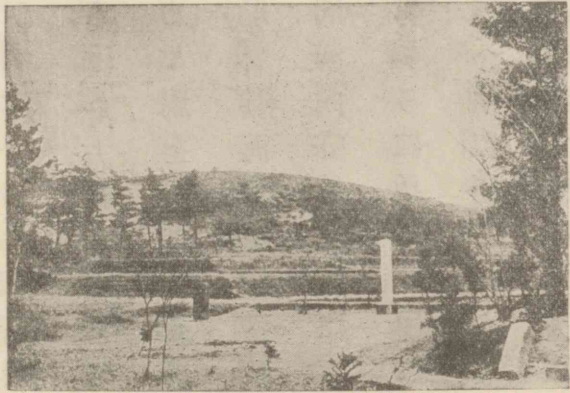
(一)前田利家。

(二)築田政綱。

後陣は先陣たるべし。只今この口より突掛り差向はせ給ふ

ならば、必ず大將義元を討取るべし」と申しければ、さらばと、忍びて山際を廻らせ給ふ。

俄に大雨降來りて、石などを投ぐる如く、敵の顔へ風吹きかく。敵の爲には向風、身方は後より吹く風なり。餘りに強き風雨にて、杳掛(一)の山の上(二)に生ひたる二がい三がいの松の



桶狭間古戦場

(一)愛知郡。

木、楠の木なども吹倒すばかりなり。これ徒事にあらず、熱田大明神の神軍か神風かなんと言ふ程なれば、身方の大勢

(一)森可成。蘭丸の父。

裏切
算を亂す

廻り來る物音少しも敵に聞えず。やがて雨の晴間を御覽じ、晴天になるとひとしく、信長公槍追取つて眞先に進ませ給ひ、「掛れ、〜」と大音擧げて下知し給ふを、森三左衛門申しけるは、「身方おり立ちて掛るならば、敵きつと備ふべし。唯このまゝ馬を入れて、乗崩し給へ。」と言ふを「尤もなり。」とて、毛利新助、林佐渡守、織田造酒丞、築田出羽守、中條小市郎、遠山甚太郎、同河内守等、大將にうち續いて一度に馬をどつと入れ、その勢勇みに勇んで、黒煙を立てて駈破れば、敵陣思ひも寄らぬ所へ俄に掛られ、心ならず後へさつと崩れたり。敵ども餘りにあわて騒いで、「喧嘩か。」と言ふ者もあり、「謀叛か。裏切か。」と思ふもあり。取捨てたる弓、槍、鐵砲、旗、指物は算を亂すに異なら

ず。中にも義元の乗り給ひし塗輿を捨置きたり。信長公これを御覽じ、「敵の旗本疑なし。愈、追詰めよ。」とて、同未の刻、東へ向いて追掛け給ふ。

(一)服部忠次。

しのぎ(鎧)を削りつば(鎧)を破る

初は敵三百許義元を圍んで退きけるを、手しげく追附けるるゝにより、二三度、四五度取つて返し討死して、次第々々にまばらになり、後にはやう〜五十騎許取つて返して戦ふ所を、信長公を始めとして、皆々馬よりおり立ちて、若武者互に先を争ひ、しのぎを削りつばを破りて、切先より火焰を出し、さん〜に戦ひける程に、手負死人は數を知らず。今川義元は無雙の勇者にて、なほこれまでも騒がず、諸勢を下知し給ふ所を、織田方の服部小平太、槍を以て突通したり。義

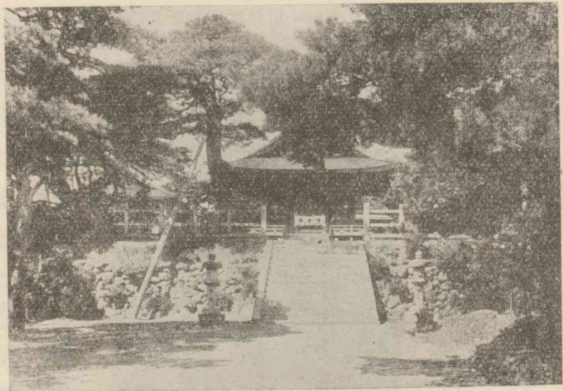
した、か者

元太刀を抜いて、小平太が膝の口を一刀切割き給ふ。小平太尻居に切附けられて、起上る事かなひ難し。毛利新助來りて、透間なく切つて掛り、義元の首を取らんとす。義元組伏せられて、はや刀にて切る事もかなひ給はず。新助が人差指にかつばとかみ附き、終にその指を食切り給ふ。新助元よりしたたかなる者なりければ、指を食切られながら、押附け、義元の首を取る。義元今年四十二歳なり。

なじかはた
まるべき

残る敵どもなじかは少しもたまるべき、總軍一度に敗北して、四方八方へ崩れ立ち、後より逃ぐる身方をも、敵の追ふよと見損じて逃散る所を、此所に押詰め、彼所に追詰め、思ふまゝに討取りけり。抑、この桶狭間と言ふ所は、山の狭間、深田

の邊にて、高み卑みうち茂り、足場何れも切所なれば、逃行く



建 勳 神 社

者ども一人に途方を失ひ、悉く討取られぬ。身方の若者ども追附き、首二つ三つづ、討取り、御前へ参りけるを、餘の首は清洲にて御實檢あるべしとて、義元の首ばかりを御一覽成され、御馬の先にその首を持たせ、勝どきを作つて、その日の申の刻に、清洲を指して御凱陣あり。首帳を

記されけるに、二千五百とぞ聞えける。これよりしてこそ、信長公の名譽は天下に轟きけれ。

— 總見記 —

自修文

辛抱くらべ

人は我慢が肝心である。ナポレオンも言つた、何でも戦闘は最後の五分間の辛抱で勝てる。と。戦闘のみではない、百事その通りで、こちらが苦しいと思へば、あちらも苦しいのだ。我慢くらべ、辛抱くらべて、勝負は分れるものである。

茲に北米合衆國の偉人、グラントと言へば、鬼將軍と唱へられて、南北戦争四年の間に、一度も負けた事のないといふ豪の者、この點より言へば、ナポレオンより偉い將軍だ。しかし、その自叙傳を繕いて見れば、彼もやつぱり人間で、決して鬼ではなかつた。

グラントが始めて戰場に出た時、一大隊を率ゐてゐたが、こはくてこはくて堪らない。しかし、誰も皆初陣の事とて、震へてゐるのもあり、顔色の青くなつてゐるのもあるから、指揮官が震へて

Ulysses Simpson Grant. 南北戦争の時、佐官。西紀一八六九年、大領となり。治十二年に我が國に來た。西紀一八八二年。自叙傳。自ら自身の一生涯を記述した。

旌旗はたのぼり。

慄然恐る様。をのしきふるへる様。恐怖心。おぢおそれる。



はならないと、大いに我慢をして力んで行くと、先方からも一隊の敵兵が進んで來た。これを見ると、その軍容の勇ましき旌旗は空に翻り、銃劍は太陽に閃き、正々堂々と押寄せ來る勢に、一目慄然とする程に恐怖心が起つた。けれども、男兒一旦死を決して出掛けた以上は、固より退く譯にはゆかぬと、度胸を定めて、こちらもどしどしと向つて行くと、もはや互に程近くなつたが、雙方とも未だ發砲はしない。一體、臆病な者は、見當も定めず、むやみに遠方から鐵砲を撃つものださうだが、兵法に従へば、成るべく接近してから、一齊にはたと撃つのが本當であるさうだ。グラントは兵學校卒業の人であるから、出來得るだけ接近してと考へて、やはり敵を見ない時の様に歩を進め、恰も恐怖などといふ事は更に知らな

渾身
全身

皆無
少しも

いといふ風に、力みかへつて向つた。すると、兵卒どもは驚いて、何と、我が大將グラントといふ人は、渾身皆膽とでも言ふべき人であらうか。我々はあごが震へ、手が震へて、物も言へぬ程怖しくなつて來たが、グラントは一向平氣な顔で進まれる。世に鬼將軍とは、實に我が大將グラントの事であらうと、感服してついて行く。グラントの心になつてみると、なか／＼鬼將軍どころでない。實は怖氣將軍で、怖くて／＼堪らないのである。まだ接近もしないうちから幾たびか發砲しようかと考へたり、または愈堪らなくなつて、逃げようかと思つたりして、遂には殆ど目も見えず、耳も聞えぬくらゐに逆せ上つて、皆無分別がつかなくなつてしまつてゐたといふ事である。

然るに、茲に一段面白いのは敵軍の方である。これは南北戦争が終つてからの話であるが、一日、偶然或所で、グラントがこの初

辟易
驚き退くこと。
諧謔
おどけ。

腹藏なく
心のうちにか
くす事のない
こと。

陣に向つた時の敵の大將何某に出會つた。ところがその將軍の話に、グラント將軍實に君の大膽には恐れ入りました。かの何年何月どこの戦に、余は初陣の事とて、おづ／＼君に向つたところが、君は一向發砲もしない、また更に退きもしない。そこで愈怖氣がついて、餘程我慢はしましたが、とう／＼浮足となつて、君にさんざん破られました。誠に君の膽力には恐れ入る。その勇武には辟易しましたと、諧謔交りに語り出すと、グラントは大口を開いて、これは實に面白い。拙者も實はかく／＼と、悉く前條の次第を物語り、君が逃げ始めたのを見て、やう／＼勇氣を回復したくらゐで、拙者の怖氣は腹より胸に至り、殆ど喉にまで上り、既に息も出來かねようとする有様であつた。と、腹藏なく當時の己が臆病を白狀して、笑ひ興じたといふ事である。

勿論、幾たびも戦場に出て、千軍萬馬の間を往來してからは、こ

干戈 たるやほこ。
 極意 おくので。
 (一) 山河の末に流るゝとちがらも身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ(空也山人)
 (二) 宗敎家。舊明石藩士。安政六年播磨國(兵庫縣)に生れた。新宗敎立志の礎となつた。著がある。
 (三) 詩人。洋畫家。明治三十一年千葉縣に生れた。爽やかな空太陽の娘の白猫眠る等の著がある。

んな事もあるまいが、初陣の時には、いかにもそんなものであらう。さうしてみれば、畢竟、少々の辛抱のくらべ合ひて、つい勝敗が分れるものだといふ事は、眞理に相違ない。どうせ死ぬか生きるかの場合であるから、唯勇往邁進の一路あるのみと度胸を定めて、何でも思ひ切つて覺悟をするのが肝要である。さうして、これは決して干戈の戦争ばかりではない。世上は萬事戦争である。びくびくしてゐると、却つて丸に中つて斃れてしまふ。劍術の極意にもある通り、身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ、鬼將軍と言はれたグラントですらも、最初はなほこの通りであつたといふ事をよく考へて、人生勝利の秘訣を此所より學ばなければならぬ。

(松村介石の文に據る)

一三三 六月の朝

宮崎 丈二

部屋々々をあけ放て、
 初々しい朝の光の中に。
 爽かな濕りをもつた朝の空氣の中に。
 かすかに揺れる草木の戦ぎよ。

けし(罌粟)の花は蔓を拂つて
 靜かに開き、
 微風にも耐へずなよくと
 あてやかな姿して立つ。
 開かんとして上向に首をのばした蕾。
 まだ首を垂れてゐる蕾。
 棘ある蔓に固く身を守る蕾の數々。

いちい(母)

紫つゆ草は朝の濕りに露を含んで開き、
オランダいちごは敷かれた稟の上に色づき、
萱は添へられた竹に捲きつき、
測り知れない空間に生命の觸手を延べてはひ登る。

蔓のある草、また蔓のない草、

點々と赤や、白や、黄や、紫の花をつけた草。

まだ生えたばかりの雙葉の草。

繁みの影からひら〜と蝶が舞つて來ては、
花々を訪れる。

群れてゐる蜂やあぶの類、

あぶ(種)

或は小さな甲蟲の類。

この間隣の軒端で生れたばかりの子雀は、
もう親雀と一緒におりて來て、

餌をあさつてゐる。

翅を震はす可憐な身振、

親雀に寄添つて。

親雀は注意深くあたりに氣を配り、

うまさうな餌をひろつては子雀に與へる。

傍の水盤の中、

もういゝ工合に古びて緑を帯びた水の中には、
子を孕んだ緋目高が點滅する。

點滅する

旺溢する

(一)國文學者、早稲田大學教授。昭和七年生れた。形明に胎した。國歌の記述と發達の研究がある。著物

庭を圍む葉櫻の繁り。
葉を透して明るい空と屋根々々。
屋根々々の向ふには遠く高く
萌えさかる生命の冠、
旺溢する森よ。
お、この六月の朝の目ざめの快さ。
部屋々々を明け放て、
初々しい朝の光の中に。
爽かな濕りをもつた朝の空氣の中に。

一四 趣味の嚴島

(一) 五十嵐 力

趣味 嚴島彌山
背景眺 藝州
備、艦 漕 塗潰
恰好色彩 堂塔
著 鮮 棟 軸 厦

(一)廣島縣(安藝國)佐伯郡。日本三景の一。(二)島の中央にある。高さ五三メートル。



(筆 熙 珍 口 山) 島 嚴

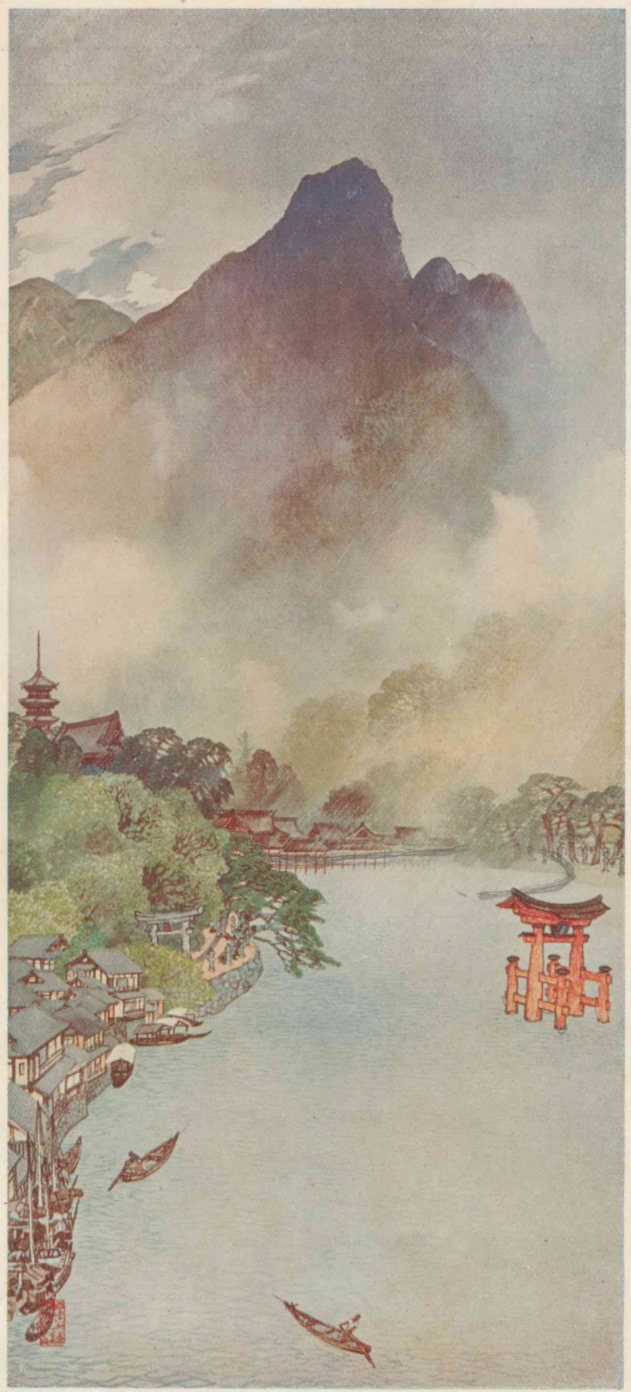
趣味の眼から見た嚴島(一)の中心の味はひはどこにあるかと言へば、我等は第一に彌山(二)を背景として立つた低い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めた所にあると思ふ。
先づ藝州本土の對岸から船を備うて、ぎい〜と艦の音面白く漕出でる。青一色で塗潰した様な恰好のよい島だと思ひながら漕いで行くと、その一色の中から、違つた色彩の社殿や堂塔が、次第に著しく浮出て来る。初めには木片を立てた様に見える鳥

壓、跨
 緩、反、
 廻廊
 沖麓
 檜皮、映
 駢列

檜皮ぶき

居が、だん／＼と大きさを加へて来る。また漕ぐ程に、鳥居も、
 社殿、堂塔も、益、大きき鮮かさを加へて来る。そのうちに次第
 に進んで大鳥居の下に來ると、我等は覺えず驚きの目を見
 張るであらう。見よ、目の前には高さ九間、棟の長さ十三間、地
 軸とも天柱とも言ふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨がつ
 てゐるではないか。向ふを見ると、青雲の中に沖つた彌山の
 麓には、二十幾棟の社殿が美しく左右に延びて、赤い柱や、緩
 やかに反つた檜皮ぶきの神々しい姿を、水面に映してゐる
 ではないか。その色彩を見よ。形状を見よ。一つ／＼の建物の
 整つた姿を見よ。多くの建物が廻廊や橋に繋がれて、美しい
 鈞合を表してゐるのを見よ。何といふ美しさ、氣高さ、神々し

宮嶋の雨 庄田鶴友筆



繞々燈籠瓦棟

脚染

幻

さであらう。

社殿の中心たる本社は寶殿である。寶殿の左右には、百二十七間といふ長い廊下が繞らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が釣つてある。この寶殿を中心として、檜皮ぶきや瓦棟の多くの建物、朱塗の圓柱に支へられて、低く美しく並んでゐる趣。縦向、横向、色々な社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を廣げた様に横長に建つてゐる趣。更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚長のすくやかな姿を見せ、満潮には波の上に浮んだ龍宮城の

鎮守 鶴尾 謙遜 物々しい
 しば(鶴尾) 累積 凝視

幻の様な光景を見せる趣。これ等のすべてが、何とも言はれぬ調和をなして、緑の山と白波の海との間に鎮まつてゐる趣。高さ、大きさ、物々しさ、荒々しさは、前後の護衛者たる山や、海や、鳥居に譲つて、社殿自らは、千木も、堅魚木も、しびも、しやちほこもない尋常な檜皮ぶきを、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへてゐる趣。この重疊累積した美しさ、ゆかしさを、何に譬へようか。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんな事を考へる。設計者の鬼神は、海底で出来上つた龍宮城を、嚴島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上がるのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計らつて、此

凝視する

立脚點

だといふ所で、びたりとせり上げを中止させたであらう。そしてこれを眺める恰好な立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうと。

— 甲鳥園隨筆 —

一五 桃源郷伊豆の大鳥 有島生馬

大鳥の自然は寧ろ單調で、貧弱の感じを起さざるを得ない。殊に淡水の缺乏と火山灰の地層とが、その感じを深くさせてゐる。しかし、それ等を補うてなほ餘りあるものは、その氣候のいゝ事である。冬でも五六度を下らないし、夏でも平均三十二度には上らない。この海洋氣候のもたらす恩恵が、様々な事に深く影響して、特殊な雰圍氣を作つてゐるので

(一)畫家、小説家。名は壬生馬。明治十五年横濱市に生れた。嘔の果、美術の秋、回想のセザンヌ等の著がある。

雰圍氣

ある。植物にも、人體にも、人事にも。

一例を言へば、あしたば、たがやなどいふ青々とした、いかにも旨さうな牧草が一年中繁茂する。その爲、大多數の島民は牛を飼ふ。その結果内地では見馴れない様々な構圖が描かれる。或時は農家の裏庭に、或時は山腹の野原に、或時は搾乳場に、晝間は固より、時としては暗夜に、この優しい目を有する家畜と村人との親しい組合せが見られる。悠長な鳴聲も到る所に聞える。その乳は飲用としては殆ど無代價の有様であるが、⁽¹⁾バター、煉乳原料、乳糖、⁽²⁾カゼインなどに製せられるから、一日二三圓になる。それによつて婦女子は樂々と獨立の生計を營む事が出来る。

⁽¹⁾Butter.
(牛酪)
⁽²⁾Casein

牧牛の影響はこの外にもある。我々は純良な牛乳を得る

と同時に、旨い子牛の肉をも十分に供給される。その上、直接東京から來るパンに新鮮なバターを副へて食ふ事が出来る。先づこれ等の食物から言ふと、旅客は歐洲の田舎にゐる様な心持がする。新聞も鎌倉、⁽¹⁾熱海邊とは違つて、市内版が届く。

言語、風俗、建築、習慣、生活、産業、社會組織、道德、宗教など、皆一種



島の風俗

⁽¹⁾静岡県(伊豆
國)田方郡熱
海町。

子細に觀察する

氣稟

敢爲

の特色を有してゐる様であるから、これ等を子細に觀察したら、それ／＼面白い點があらう。島民の體質と容貌、心狀と氣稟、これ等には最も驚かされた。體質は優良、容貌は端麗、心狀は健全安定、氣稟は快活、敢爲、そして勞働を愛する。こんな抽象的な言葉を並べただけでは實況ははうふつすまいが、とにかく、彼等の生活くらゐ樂園の住人に近いのは、他に澤山はなからう。そしてこんな原始的な住民をもつてゐる事、それが大島の桃源郷たる第一の原因である。

大島が伊豆、相模、安房の沿海に位しながら、近年まで全く内地の文化と没交渉で、特殊な個人、特殊な社會を作つて來た事は、世界に於ける一奇觀といふ事が出來よう。どこの國

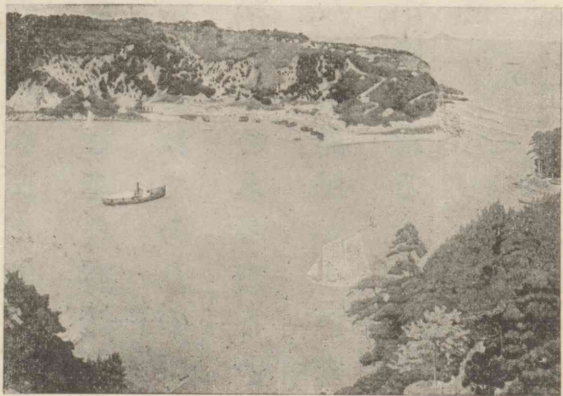
故老

おきて(掟)

のどこに、こんな不思議な現象が見られよう。單に交通が不便だつたと言ふだけでは、とても説明しきれない程他とは異なつてゐる。私にはその原因がはつきり分らなかつた。所が、私が島に行つた時、或故老から次の話を聞いて、略その原因が明らかになつた様に思へた。

それは、舊幕時代に甚だ妙な一つのおきての布かれてゐた事である。

このおきては幕府側から言へば、島民に對する特殊な厚意的保護といふよりも、一種の皮肉な政策に過ぎなかつたの



波 浮 港 (筆 茂 村 藤)

(一)伊豆七島の
一周一〇キロ
メトル
(二)伊豆七島の
一周二八キロ
メトル

鎖國主義

だらう。そのおきては、たとひ難破船、漂流者が寄つて來ても、若しそれが本土人だつたら、一物をも與へないですぐ追拂へ。但し利島(一)新島(二)などはゆる伊豆列島の住民だけには、除外例として炭水を供給してもよい。すべてこんな有様だつたから、交通、貿易、移住などは絶対に禁ぜられてゐたのである。この驚くべき残酷な鎖國主義のおきてのあつたといふ事實で、始めて其所の生活の原始的なもの、島民が一種固有な特別の發達を遂げたのも、略明らかになる。

一六 夏の小曆

田山花袋

七月初旬の曇天は、續いて月の末に至る事あり。また中旬

(三)小説家。名は録。彌。群。馬。縣。年。六。十。五。田。舎。源。義。朝。殘。雪。外。紀。行。の。隨。筆。等。著。が。あり。等。す。べ。て。花。袋。全。集。に。あ。る。收。め。ら。れ。て。ゐ。る。

赫々たる炎威

より晴れて、赫々たる炎威を恣にする事あり。茲に至りて人は始めて夏の暑さを感じず。

華胥に遊ぶ

(いざ) (藍)

夏は曇りたるより照りたるぞよき。碧空に日の光きら、かに輝きて金をもとかさん日、靜かに机に向ひて書を讀むも興なきにあらず。黄塵の堆き裡におのが業にいそしむも、またおのづから楽しみあり。芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞きつゝ、靜かに華胥に遊ぶ暇あらば、いかに嬉しからん。日の暮るゝを待ちて檐の岐阜提燈に火を點じ、縁に花ござ敷きて、團扇搖がしつゝ、一家だんらんの物語に耽る、眞に得難き夏の賜なるべし。闇の夜にてもよし。空に閃く星の影を數へて、北斗の所在などを指さし合はん。月あらば更によ

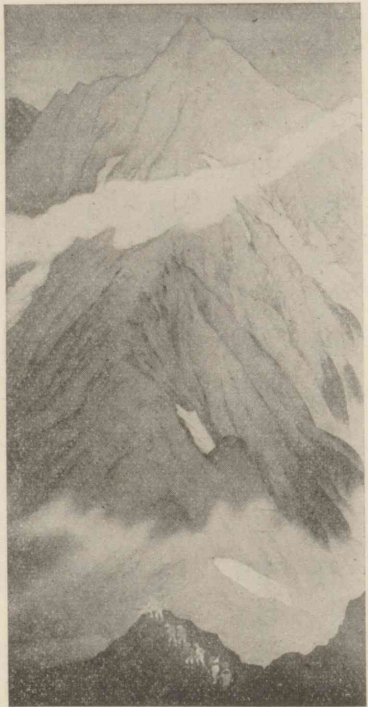
ゆくりなし

し。梧桐、寒山竹の間より、研澄したる鏡の如き光を仰がんに
 は、晝の暑さも忘れ果つべし。
 幼き頃田舎にゐて、垣根の杉などを手折り來て、古すり鉢
 に灰少し入れて、蚊燻したる事を想ひ起す。蚊遣火は趣深き
 ものなり。其所とも知らぬ森の中に、ゆくりなく立昇る蚊遣
 の烟此所にも人住めりやと懐かし。
 夏の旅殊にをかし。日盛の二三時間を、松並木の涼しき休
 茶屋に寝て過し、朝と夕とに歩みても、日永き頃なれば、冬の
 日よりも却つて長き里程を歩み得べし。田舎路の休茶屋な
 どに、清き水涌出でてさうめんを冷したる、食指おのづから
 動く。

さうめん
(素麵)
食指動く

一望天下を
小とす

(一) 飛騨、信濃の
 境上にある休
 劍峯には最高
 神社の御嶽が
 ある。高さは
 〇六三〇メ
 ル。六三〇メ
 (二) 長野縣の南
 木曾山脈の中
 五、六、七、八、
 山、高さは二
 長野縣の北部
 (三) 富山縣の北
 富山縣の境に
 九、三、三、メ
 飛騨、信濃の
 (四) 上方御嶽の
 境上にある。高
 方、三、八、〇、
 一、三、〇、メ
 (五) 富山縣の東部
 三、〇、〇、メ
 三、〇、〇、メ



登山 (野田九浦筆)

登山も夏の面白きもの一つなり。輕装して都を出て、遙
 かに連山の蒼翠を望む、心既に白雲の上にある。登山の快は
 絶巔に登り得たる時にあり。これ言ふを俟たず、されど絶巔
 に至るの努力も、ま
 た一快なり。喘ぎ喘
 ぎ登るに、森林盡き、
 草原盡き、高山植物
 盡き、遂に岩石磊々
 たる所に達す。一望誠に天下を小とするの思あるべし。登る
 べき山は富士山を始め、木曾の御嶽、駒ヶ嶽、更に日本アルプス
 の雄峯たる信濃の白馬嶽、槍ヶ嶽、並びに越中の立山など、なほ

到る所多し。

海もよし。山もよし。山ならば老樹深く、溪流清く、嵐氣肌を襲ふ所、殊によし。海ならば絶海の邊、怒濤天を衝く邊に行くを要す。世の常の海水浴場など、徒に暑さを増すの料たらんのみ。

七月中旬乃至下旬より晴れたる空は、年によりて多少の相違はあれど、十五日乃至二十日續くべし。この照によりて、稻もその株を分蘖せしむ。この照、この暑さの稍緩む時、即ち土用のあけ頃より、低氣壓襲ひ來りて、夏の雨頻りなり。

沛然

夏の雨は驟雨性を帶ぶ。忽ち晴れて美しき空現れ、日の光射すかと思へば、白き黒き雲忽ち襲ひ來て、雨沛然として到

る。物干竿の衣を取入るゝ暇もなし。その雨量比較的によく、所によりては河水氾濫し、鐵道不通になる事も往々にしてあり。

この雨晴れて秋氣到る。殘暑なほ凌ぎ難けれど、樹間、叢裡、既に秋の聲あり。梧桐、芭蕉は殊にこの聲を聞くに佳し。歐陽修が秋聲賦の思ひ出さるゝはこの頃なり。

雲の色と態と稍趣を變ふ。奇峯漸く少く、白き雲多し。

夜、稻妻の遠く光るもこの頃なり。一閃毎に闇の中の雲の姿を明らかに辨じ得たる、言ひ知らず面白し。田の面には涼しき風吹渡る。

— 花袋小品 —

一七 沙漠の花

吉江喬松



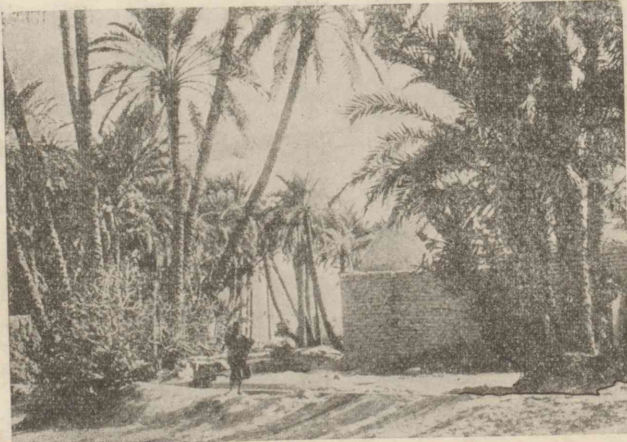
(筆雲祥井有) 桃竹夾

大都市の中に囚はれてゐる植物を思ふ時、すぐ我々の胸に浮ぶ者は夾竹桃の花である。大阪の市中では、特にこの花は到る所に目につく。土壁の上から、商店の軒から、どこに見るよりも、殊に平坦な大阪の市街の到る所に、夏を更に暑く感じさせる。大阪ではこの花の繁茂するが如く、咲誇つてゐるのである。

(一) 佛文學者、早稲文
 田博士、授松
 明治十三年、記
 本蘭西、生れ、象
 佛市、讀本、南
 自、然、著
 歐、有、の

(1) Sahara
 アフリカの西
 北部にある沙
 漠。
 (2) Arabia
 沙漠中の沃地。

るのを今では嫌ふ人がある程であるとも聞いてゐる。この夾竹桃の木とても、いついかなる時に我々の國に移植されたのであらうか。植物の移動の跡にも、必ず一定の人間の文化が伴隨してゐるに違ない。この花は正しく日本古來のものではない。それではどこから持運ばれたものであらうか。夾竹桃の故郷はいづこぞ。アフリカのサハラ⁽¹⁾の沙漠の中に遠く點在するオアシス⁽²⁾こそは、この花の生れ故郷であ



スシアオの中漠沙ラハサ

た、へる
(港)

る。沙漠の中を旅して歩く隊商等が、遠い地平線上に緑地の影を見出してたどり著く夕暮に、その黄沙地の島の如き中に水をたゝへ、その水沿ひに濃緑の竹の葉の如き茂みの中に無數に群がり咲いて、紅玉の光に疲れた彼等の眼を悦ばす物は、この夾竹桃の花である。

我々の乗つてゐた船が、先年喜望峯を迂廻して、大西洋を北へセントヘレナを遙かに左手遠く眺めやつて、再び赤道を越えて航行して行つた時、イギリスへ到着するまでに唯一回、セネガルの港、ダカルへ寄航した事があつた。此所はアフリカの西北部の出張つた一端であり、この港から數十キロメートル汽車が内地へ向つて走れば、それが既にサハラ

①Gape of Good Hope. アフリカの西南端の岬。
②Saint Helena. アフリカの西南にあり孤島。
③ある紀元一八五年にナポレオンが流されたこの島で歿した。
④Senegal. アフリカの西北部に當る。サハラに當る。
⑤Dakar.

沙漠へ乗込む事となるのである。黒色の老大陸のその一端に足に乗せたばかりでも、地熱を感じずる様な、空氣も重くよどんでゐた。物音一つない熱氣の静寂がその地一帯を領してゐた。砂地だ。到る所が砂地である。その砂地の上に濃緑の葉を茂らせて、紅色の花の房々をつけて、己が郷土に咲誇つてゐる花木が、この熱氣の大陸を飾る主な植物であつた。これが夾竹桃である。日本で見るよりも丈も高く、繁茂した勢はすべての熱帯植物に見る如き物凄いものであつた。己が生れ故郷で思ふまゝに伸びる自由さを見せて、房花の色も鮮かに、空に向つて悠然と頭を擧げてゐた。そしてこの花木の茂みの中を、こそく驅抜けて行く者は、セネガルの兒童

等、純黒人の子供であつた。唇と舌とだけは赤いけれども、吐く息さへも黒いかと思はれる彼等は、片語の、黒いフランス語をしやべり散した。

これ等の黒人等の生涯の背景となつてゐるのが夾竹桃である。少年時の遊場所も、彼等が葬られる墓場も、要するに彼等の一生涯を通じて、遂に夾竹桃の花で縁どられた額面の中から脱する事は出来ない。夾竹桃の花はアフリカ人の生涯の額縁である。アフリカ老大陸は到る所にこの花木を繁茂せしめ、サハラのの沙漠の中にまで生命を送り込み、苟もアフリカの土地の一邊でものある所には、この夾竹桃は姿を見せてゐるのである。我々は、ケープ・タウンの街々でも、石

Capetown.
ケープタウン
及び南アフリカ
の首都。アフリ
カの南端にあ
る。近い港市で

Madagascar.
マダガスカル
アフリカの東
南、印度洋中
にある島。フ
ランス領。

を敷詰められた巷路の角々に、この花木の誇りやかな容姿に接した。

このアフリカの花木が、いつ、いかなる時か、または何人の手で、或はいかなる手段で、遠い海を越え、印度洋を渡つて、日本へ持つて來られた事であらう。マダガスカルのの沖合などでは、時々落花と木の實との幅廣い香り高い幾キロメートルにも互る波のうねりに打當る事がある。これは植物自身が海を越えて漂泊の旅へ乗出した姿である。沙漠を越えて幾キロメートルにも互る移動蟻の隊伍の様に、植物自身が新しい天地を探しに出かけるのである。漂泊の旅の果が、かくして極東の日本へたどり著いたのか、それとも何人かの

船舶がスエズを通航する以前に、喜望峯を越えて東へ航行して来た時、それ等の船を利用して、船荷の一端に、船體のどこかに、船側か、檣に取著いて、幾つかの小さな木の實が、遙々渡航して来たのかも知れぬ。夾竹桃の花もまた我々に植物移動と文化移動との歴史を物語つてゐる。——南歐の空——

一八 夏空を飛ぶその一

鈴木文史朗

機は京濱國道の眞上を、つばくらの様に一文字に飛んで行く。大森羽田の海岸は今が書入れの海水浴場、例により鳴物入りで、旗、差物おし立ててやつてゐる。海は生憎紺の水ではないので、ボール紙へ胡麻鹽を振りまいた様に、人間ども

(一)新聞記者。明治二十四年。明葉縣に生れた。東西旅行の著がある。
(二)東京市大森區。同蒲田區。
書入れ

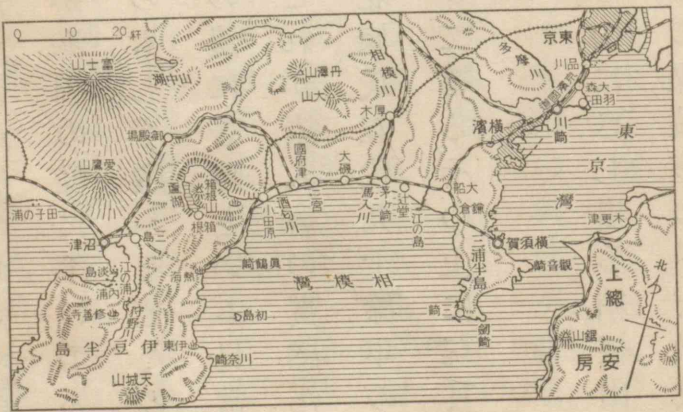
(一)神奈川県(相模國)中郡。別荘地。海水浴場として知られてゐる。

(二)同縣(同)三浦郡。三浦半島の最南端。

が水遊をしてゐる。

横濱の上空から安房、上總の山々を左に、三浦半島の根もとを一跨ぎに大磯に出る。五百メートルの低空に舞下つて敬意を表する。漁師の暑中休暇でもあるまいに、寄席の土間にぎつしり下駄を並べた様に、小舟が濱に上つてゐる。

大磯の上から弓なりに灣入した相模灣の岸傳ひに飛んで行く。振返つて見ると、三浦半島の三崎邊が引き絞つた弓弦の下の附



ひだ(髪)

開關
Marathon.

下る様に飛ぶと思つたのは、湖水を圍む山々の幾十條のひだが、三島へ向つて競走してゐる様に見えるからだ。壯大な山の線の動きだ。天地開關の昔、山の線も一生に一度のマラソン競走をしたに相違なからう。

蘆湖の上から三島へ向つて行くと、始めて機は揺れ出した。駿河灣から吹く嵐が、三島の峽谷をはひ上つて山にぶつかるあほりらしい。揺れると言ふよりも、ガクリ／＼と小刻みに落ちるといふ方が當つてゐる。その小刻みは二尺か三尺の感じだが、實際は五十尺、百尺はあるのだといふ。豫てから聞かされてゐたから、何だ、これくらゐかと力瘤を抜いたのは先づめでたい。

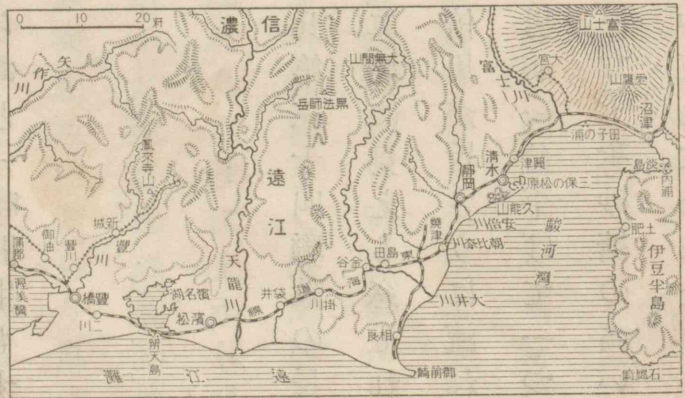
(一)静岡縣(駿河國)沼津市。東海道の要衝。
(二)天城山中に發して北し、沼津で海に注いでゐる。
(三)同縣(同)駿東郡靜浦村。
(四)江の浦の港門を扼する小島。

(五)同縣(同)清水市。風光に富み、殊に羽衣の謡曲で名高い。

(六)庵原郡。

蘆湖から六分で三島の上。三島から六分で沼津の町。海岸の松林、青い狩野川、入口に次ぐ入江の連なる江の浦、殊に陣笠を伏せた様な淡島あたりの美しさは、空から見て更に格別だ。

沼津から海へ出て、三保の松原あたり目掛けて、千六七百メートルの空中に、目に見えぬ直線を引いて行く。興津の町の上へ出て見ると、東海道線が茸の細い裂目の様で、列車がその上を毛蟲の様にの



たくつてゐる。この毛蟲はもう十二時間ものたくらなないと大阪へは著かない。僕等はこの調子なら、あと一時間半もすれば、大阪ずして晝飯の豫定である。

一九 夏空を飛ぶ その二

空から見て印象的な静岡の眺は、歩兵第三十四聯隊の長方形なグラウンドを圍む白い兵舎と、眞黒に見える窓。それは鯨幕を張廻した様だ。市の西には安倍川が旨さうに流れてゐる。江戸の昔、名物の餅を伊勢參の男が一盆平げて一つ五文と聞いて驚いた。居合せた通な江戸つ子が「砂糖の高いの知らないか。白砂糖を使ふ餅が道中どこにある。」と、餅屋

(一)甲斐の境界なる安倍峠に發する静岡の西端に發し、南流して静岡の河灣に注いでゐる。
通な

に代つて辯じたとやら。白砂糖が珍しかつた時代の安倍川は、飛行機の下でも同じ瀬筋を流れてゐる。



岡靜た見らか上機行飛

安倍川の上から東海道本線傳ひ二分間で、名前負けのした様な朝比奈川、その河口に焼津の町。焼津から二分間で、大井川。維新までは海道一の難所と言はれただけに、上から見ても物凄い。越すに越されぬ。昔語は、江戸の町人彌次、北八に譲らう。島田金谷の川問屋は驛の運送屋と變り、新しく出來た大鐵橋も川下に見える。

(一)同縣(同)志太郡の朝比奈村に流し、焼津で海に注いでゐる。
(二)志太郡の中心地。漁業の中心地。
(三)赤石山脈中の最高峰。白鬮山に發し、石山等山の連峰の東側を流し、谷を穿つて南流し、平野になつて駿河湾に注いでゐる。
(四)江戸時代の小説家十返舎一九の『滑道中』に登場する人物。
(五)同縣(遠江國)榛原郡。

(一) 静岡縣(遠江國)小笠郡
(二) 同縣(同)磐田郡

(三) 遠江國の西海岸に手の指の形をして廣がり、南端は水道をなし外海と通じてゐる
(四) 愛知縣(三河國)寶飯郡
(五) 同縣(同)南設樂郡
(六) 寶飯郡
(七) 同縣(同)渥美郡
(八) 寶飯郡、風光よく海水浴場として知られてゐる
(九) 静岡縣(伊豆國)田方郡
(一〇) 伊豆半島の中部にある火山、最高峯萬三郎山は高さ一四五〇メートル

(一) 愛知縣西南部の半島で、伊勢海からその支溝三河灣を分つてゐる

沃野

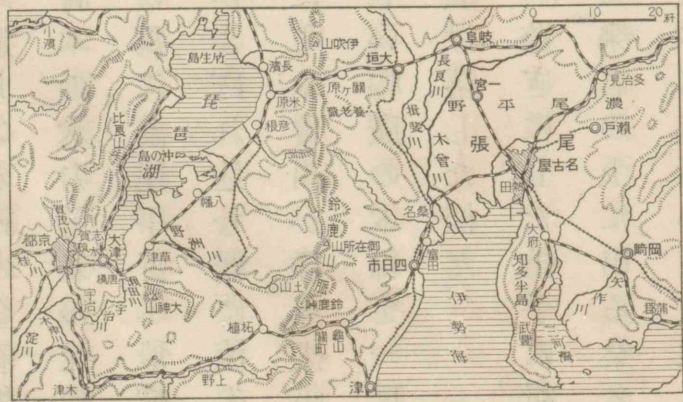
うなぎ(鰻)

(二) 長野縣伊那郡に發し、南流し足助川、太平川を合せ、多灣に注いでゐる

絶叫する

金谷掛川を飛越え、袋井の上まで来ると天龍川の下流と、西岸の廣い平野とが、もう目の下に展開する。諏訪湖から十六里、信遠の山々を押分け、遠江灘目掛けてころげ落ちて来るこの川は、誠に痛快なものだ。濱松には遙かに敬意を表して、四分間で濱名湖を過ぎて、ちよつとした山續きを五六分、すぐに豊川の平野に出る。豊橋市を中心に、遠くは新城町から豊川町、御油町、二川町と幾十かの町が、渥美灣の岸を底邊とした三角形の平野の中に、日廻草の様に咲いてゐる。御油町の上から渥美灣の水色に誘惑されて、蒲郡の上まで出て見る。駿河灣の内浦か江の浦、或は瀬戸内海の一角をもつて来た様、後に連なる緑の天城山脈も、少女の群の様に

かはいらしい。蒲郡の上から、知多半島を迂回する。三河の山と知多半島との間に挟まれた尾張の沃野が、巨大な俎の様に長方形に廣がつて、その上にはすかひに、うなぎがのたくつてゐるのが、矢作川だ。知多半島の伊勢濱傳ひに名古屋の上へ出る。見渡したところ、大風呂敷を廣げるとはこんな物かと言ひたい程、濃尾平野が廣がつてゐる。それに應じて名古屋市も廣い。青年都市人口九十萬、帝國第三位と近頃頻り

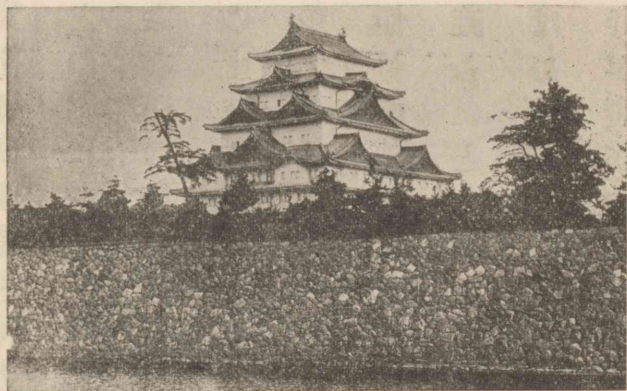


元締

(一)源を木曾山脈と飛驒山脈との間の溪谷に發し、長良川、揖斐川等の支流を合せ、下流に大三角洲を作つて伊勢海に注いでゐる。

(二)木曾川の支流。

(三)三重縣(伊勢國)桑名郡。東海道五十三次の要衝として古くから榮えた。



に絶叫するだけの事はある。遠くの空から見ても、金のしやちほこは文字通りこの市の金看板だ。名古屋を日本の水力電氣の元締と威張らせる爲に、濃尾平野へ飛驒美濃の大河がこぼれ込む様に流入してゐる。中にも、木曾川が群を抜いて大きく美しい。幅廣の木綿を一反庭から海へ廣げ落した様だ。
木曾川を一跨ぎにした拍手に揖斐川も跨いで、桑名の上に出る。桑名は揖斐川がもつて來た土砂が積り積つて其所から自然と

涌出た町の様に、時代の附いた色をしてゐる。上方參の客は、宮と呼ばれた熱田から、海上七里を渡船で此所まで渡つたものださうだ。珍しく大きな帆船が町から川を下つて、宮の方へ向つて行くのが、いかにも桑名らしい。

桑名を過ぎて三四分、富田の町。玩具の船と言ひたいが、田圃の小川を遊弋する水すましの一群の様に見える小舟が、無數に港にもやつてゐる。この町のあたりから機を千四百メートルの上に高めて、伊勢海の觀望を恣にする。眞下を見ると、紺碧の烏帽子の布地に、一面に絹絲の様な細い線が動いてゐる。波だ。沖の方は少し荒れてゐると見えて、白い波頭がつばなの花でも咲出した様に見える。

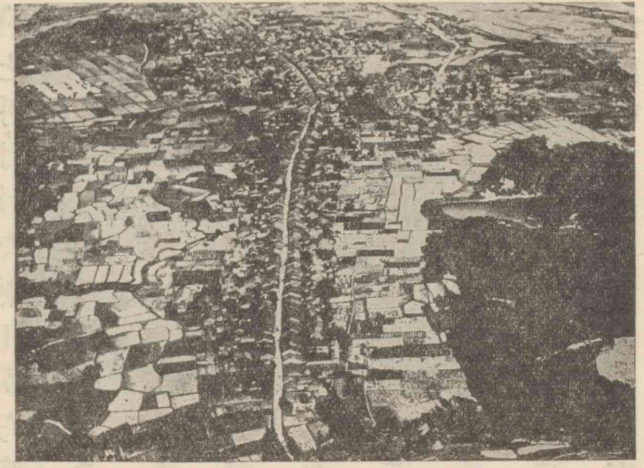
もやふ(紡)

(一)三重縣(伊勢國)三重郡。

つばな茅花

(一)同縣(同)四日市
 五十三次東海道
 驛として古く一
 ら知られて
 る
 (二)同縣(同)鈴鹿
 郡
 (三)同郡
 むかで(百
 足、蜈蚣)
 (四)鈴鹿山脈中の
 一峯、高さ三
 七八、鈴鹿山脈
 ル。鈴鹿地方の
 は近畿東部の
 うちで、連な
 を南北に、管
 なる山脈に、鈴
 鹿關等が、所
 を破る。旅人
 を檢べて、入

(一)四日市を過ぎ、龜山を越し、關町の一本街の上に出る。この



飛行機上から見た關町

町はまるでむかでの様だ。鈴鹿峠へ向つてはひ上つて行くのだらう。鈴鹿と言へば箱根に次ぐ空の難所だが、どうやら晴れたり曇つたりしてゐるらしい空模様だ。愈、鈴鹿越しとなる。關の上で鐵道線路と別れ、機首を聊か右にして、山脈の上のしかゝる。名にふさはしくかはい

い山脈。無數に續く山のうねりが、波のうねりと驚く程似て

尾根
 (二)滋賀縣甲賀郡

ある。照り曇りするので、陽光と雲影とが、そちこちの山にだんだら染に現れる。陽光の部分は燃立つ様な黄線、雲影はそれに淡墨を塗つた様。機が陽光の下を潛ると、機影がつと山の傾斜面に映る。長大な蝙蝠の影だ。それが機の進むに隨つて山から谷、谷から山、時には眞下にじつとしてゐる白雲の一團の上に映る。機上から見る大自然のフィルム(一)のこまの變轉のうち、これ程なものはない。

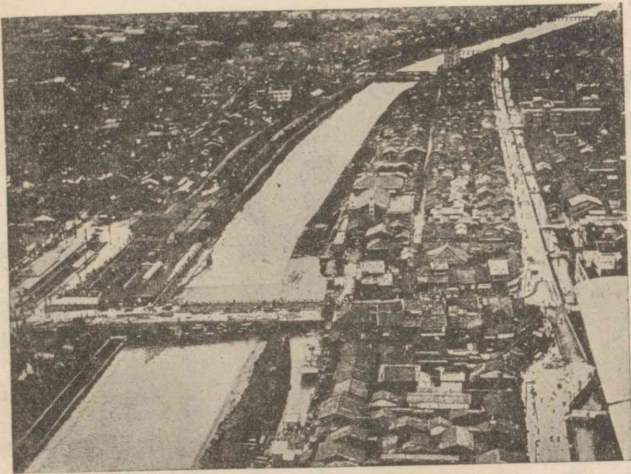
鈴鹿の尾根を通り越したかと思ふと、南無三寶機はどうやらギクリガクリと動搖を始めた。しかし幸ひ、山越えの揺れも何の事なく一滑りに下つて、小さな溪谷の町へ出る。坂は照る。鈴鹿は曇る。の古い民謡で知られた間の土山だ。(二)

(一)同縣栗太郡
 (二)同縣大津市
 (三)琵琶湖の西岸
 高き一七四
 良の暮雪は比
 近江八景の一
 月代
 (四)琵琶湖中部の
 小島
 (五)琵琶湖北部の
 須磨社、久保
 天竺堂がある
 (六)琵琶湖の南端
 川に發する瀬田
 つて宇治川と入
 なり西北流
 ては伏見を經
 川を合流し桂
 川に入つて木
 津川に合流し大
 津流し大津で
 南流し大津で
 阪洲をなして
 (七)名瀬田
 (八)名瀬田
 界をなして瀬
 (九)名瀬田
 界をなして瀬
 (十)名瀬田
 界をなして瀬
 平渡りと踏鳴す
 田の長橋うち
 平記云々(六)太

土山から十二分で草津の町。草津から低空を大津目掛けて
 飛んで行く。比良の連山が青絹の衣紋つくろつたお大名の
 様に澄しこんである。琵琶の水鏡に青い月代がちら／＼映
 る。見渡した所、沖の島あたりから奥は、鏡面は息を吹掛けた
 様に曇つてゐる。竹生島らしいのが指先でその上へ「ノ」の字
 を書いた様に浮んでゐる。汐ならぬ海は、上から見て益、淡く
 優しい。宇治川となり淀川となつて、惜氣もなく湖の水を放
 ち出させる瀬田川が、勢ひ込んで滋賀栗太の山間を馳せて
 行くのが、をかしい様によく見える。これだけは手前の鐵橋
 を汽車で通つても、向ふの唐橋を駒もとゞろと踏鳴して通
 つても見られぬ景色である。

(一)江戸時代の浮
 世繪師。安藤
 氏もあつた。に
 巧みで、景畫
 中五、三、二
 高十、三、一
 年一、五、六
 十、二、八

(二)東京市日本橋
 區。橋の中央
 標に全國里程
 がある。



橋大條三た見らか上機行飛

瀬田川口から大津の上を掠めて、疏水に沿うて五六分散
 歩すると、京都の屋根が扇子を
 開く様に展開して来る。廣重の
 五十三次の最後の繪に、「大尾、京
 都三條大橋」と記したその三條
 大橋も、上から見てはあつけな
 い。川に沿うて、京の三條のまた
 三條、合せて六條の珠數屋町、あ
 たりの上に出る。今朝、日本橋を
 出てから二時間と三十五分。短
 くも長くもある東海道の空の旅。

自修文

飛行機の話

大地を離れ得ない人類に取つて、その頭上に廣々と展開して
 ゐる蒼空を自由に天翔りたいといふのは、人類がこの世に生れ
 來て以來の欲望であつた。一雙の翼を以て輕々とこの天空を快
 翔する鳥類は、かうした人類の限りないあこがれの的であつた。
 この欲望憧憬は、一方に東西の神話、傳説の上に澤山の人間飛翔
 の話を残し、一方に鳥類を模倣した飛行法を考案せしめた。我が
 國に於けるこの考案者の一人として、備前岡山の表具師幸吉の
 話が傳へられてゐる。

幸吉は鳩を捕へて、その體軀と羽翼との釣合を研究し、自分の
 體重に釣合ふ翼を作り、胸にこれを操る機械を取付け、その翼を
 搏つて飛翔する事を考案した。一日これで郊外を飛行してゐる

天翔る
 空を飛びかけ
 ける。はやく飛びか
 ける。

憧憬
 あこがれ。
 考案する
 工夫する。

野宴を張る
 野外でさかも
 りする。
 墜落する
 おちる。

追放
 罪人をおひは
 なつたこと。
 Leonardo
 da Vinci.
 イタリーの畫
 家。詩人。思想
 家の方面にも
 造詣が深かつ
 た。西紀一五
 九二年。

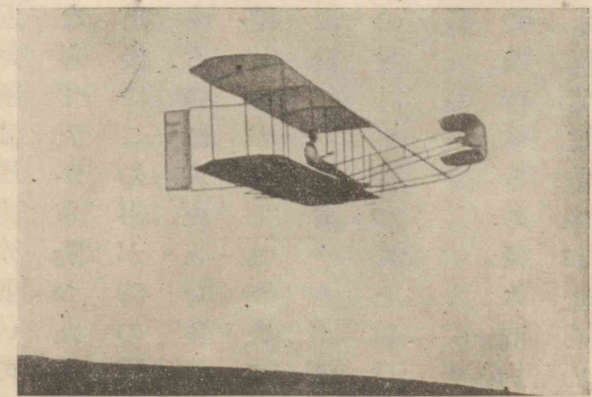
(Lider.)
 發動機のない
 飛行機。普通
 の飛行機と異
 なるのは、重
 心を加減する
 爲に搭乗する
 主翼の前方に
 ある點である。

と、遙かに下方で野宴を張つてゐる者がある。若しや知つた人で
 はと、近寄つて見ようとすると、地面に近い所は風力が弱いので、
 思はずその場に墜落してしまつた。時ならず天から降つた人間
 に、宴半ばの男女は驚き叫んで逃去つた。後にこの事が時の役所
 に聞え、慰みとはいひ、人のしない事をするのは罪だといふので、
 幸吉はせつかくの兩翼を取上げられ、追放されてしまつた。これ
 は寛政以前の事實であるといふ。外國に於ても、レオナルド・ダ・ビ
 ンチが鳥類に似せた羽ばたき飛行機の設計を作つたと言はれ
 てゐる。

しかしその後、鳥の様に翼を動かして飛行するのは、人間力で
 は到底不可能であり、機械力を用ひても非常に能率が上らぬ事
 が知られ、十九世紀の初頃からは、翼を動かさずに、いはゆるグラ
 イダーで滑空飛行をする事が考へられて來た。

①George Cayley. イギリスの發明家。西紀一八四八—一八九六年)
 ②Otto Lilienthal. ドイツの發明家。西紀一八六八—一八九六年)
 原理 おほもとの道

西紀一八〇九年英國のケレーはこれの原理を發見し、その原理に基づいて種々の飛行機を作つたが、まだ成功する事が出来なかつた。またドイツのリリエンタールは長い間鳥の飛行ひしやうに就いて研究した結果、同一八八九年に「飛行術の基礎たる鳥類の飛行」といふ論文を發表し、自ら種々の飛行機を造つて實驗したが、まだその成功を見ないうちに不幸墜落慘死してしまつた。



— グ イ ラ グ

ケレー、リリエンタール等のグライダー研究と共に忘れてはならぬのが、我が國飛行研究家二宮忠八である。

氏は明治二十三年(西紀一八九〇年)以來、獨力グライダーの研究

遜色 ひげ。みおと
 二。遜色のな
 といはひけを
 とらぬ意。

痛恨事 非常に残念な
 事。

①Adler.

②Gasoline. 氣運
 きざし。廻り
 あはせ。いき
 ほひ。先鞭を著ける
 先んじて著手
 する。

に従ひ、遂に現今の發達したグライダーと比較して少しも遜色そんしやくのない物を完成したが、不幸にしてその後を繼ぐ者がなく、その研究は氏一代で絶えて、飛行機發達史上最近までその功その名の埋れて居つた事は、獨り氏のみならず、我が國民に取つても痛恨事であつた。

飛行機の原理が明らかになると共に、飛行機の研究は一層進んで、今までは單に空中滑走だけしか出来なかつたグライダーに發動機を据附け、人間が乗つて自由に空中を飛行しようといふ試が行はれ、遂に西紀一八九七年フランスのアデルが蒸氣機關を原動力とする飛行機を發明して、三百メートルを飛行した。この頃から重量の極めて小さいガソリン發動機が製作される様になつて、飛行機は急に發達の氣運に向つた。このガソリン發動機を用ひて、現代飛行機の先鞭を著けたのが、實にアメリカ

(1)Wright
兄弟(西一八
九一年)の
飛行機は
二馬力(一
九〇五年)
の飛行機
を作った。

馬力
動力の単位。

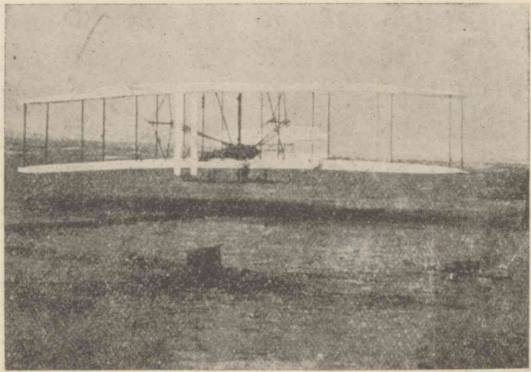
(2)Carolina

北アメリカ
海岸の州。南

北ある。

(3)Kitty Hawk

記録
最も優秀な成
績。



機行飛たし用使の弟兄トイラ

の(1)ライト兄弟は種々苦心した末、十六馬力の發動機を据附けた
ライト兄弟は種々苦心した末、十六馬力の發動機を据附けた
復葉飛行機を作り、西紀一九〇五年十
二月十七日、北カロライナの(2)キッティホー
クで四回の飛行を行ひ、最後の飛行で
は滞空時間五十九秒、飛行距離二百六
十メートルの記録を挙げた。
かくて飛行機が空を飛び得る時代
は遂に來た。ライト兄弟がそのおぼつ
かない足跡を空界に残してから僅か
に三十年足らず、現在の様に目覺しい
航空時代が出現したのである。その間の飛行機の進歩發達には、
實に驚異に値するものがある。

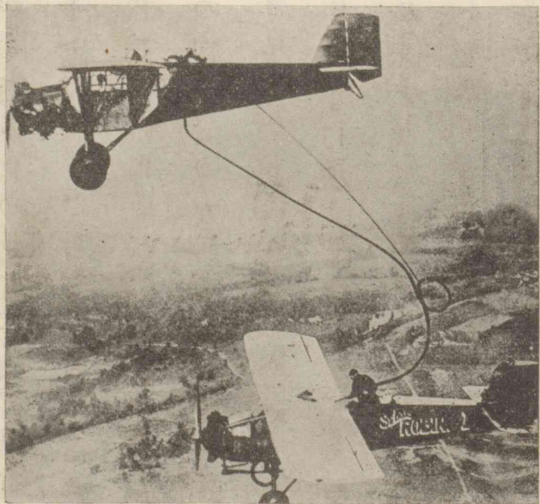
(1)record
記録。
一瞥
ちよつとみる。

音の速さ
三百四十秒メ
ートル。

酸素吸入
高度が増せば
酸素が減少す
る。呼吸が困
難となるので
圧縮した酸素
とを携帶して
酸素を吸入す
る。
人事不省
意識を失ふこ

次にその進歩の跡をたどるべく、飛行機の作つた最近の各種
の(1)レコードを一瞥しよう。

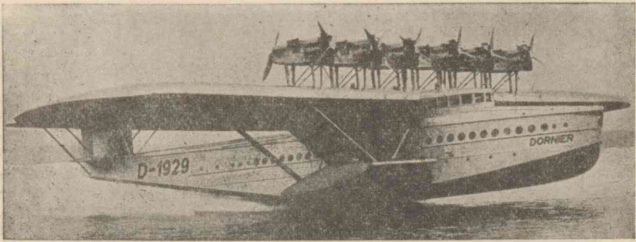
速度のレコードは一時間六
百八十二キロメートルで、これ
は一秒間百九十メートルの割
に當り、音の速さの半分以上に
達する。しかし、これは特別のレ
コードであつて、普通飛んでゐ
る飛行機では、秒速四十乃至六
十メートルくらいである。高度
のレコードは一萬三千百五十
七メートルで、勿論酸素吸入をやりながら、それでもなほ、人事不
省になるかならぬかの境をさまよつて漸く成功したものであ



機行飛の中油給中空

空中給油
空中で飛行を
続けながら甲
乙の飛行機から
ガソリンを補給
すること。

赤道
地軸に直交し
南北極から九
十度の距離に
ある圓赤道に
一周は約四萬
七千六百九十
トロンキメ
(Dornier)
ドルニエ
士の設計
六月九日
客を乗せて
断事大西洋
横



ドック水上飛行艇

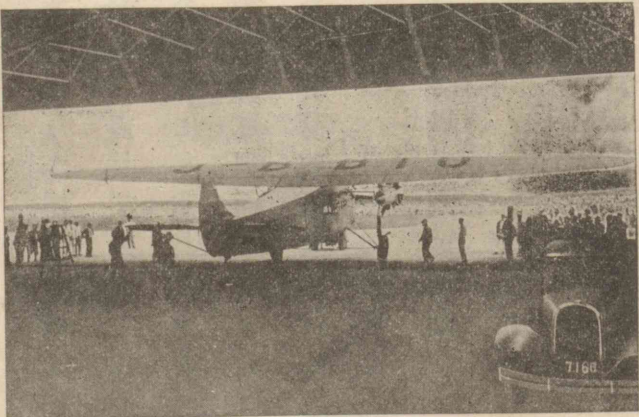
この高さは富士山の約三倍半に達してゐる。滞空時間のレコードでは、いはゆる空中給油を行つた方では六百四十七時間半、即ち約二十七日、空中給油なしの方では約八十四時間半を挙げ、航続距離のレコードでは約八千六十五キロメートル、赤道周囲の約五分の一に達してゐる。またその大きさをみると、現在最大の飛行機であるドイツの^(一)ドルニエ會社製の^(二)ドックス水上飛行艇は、高さ九メートル、長さ四十メートル、幅四十八メートル、五百馬力の發動機を十二箇も据附けてゐる。その艇内は丁度汽船と同様に上中下の三甲板に區劃されて、下甲板には燃料、貨物等を積込み、中甲板には居室、食堂、寢室等があり、上甲板

隔世の感
へだたつた時
代の様な感じ。

必須
必ず入用な。

には操縦室、機關室、乗組員室、無線電信室等がある。これで百二十人の旅客を載せ、毎時二百キロメートルの速さで、十時間くらゐ續けて飛ぶ事が出来るといふ。ライト兄弟時代と比べる時、正に隔世の感があるではないか。

かくて飛行機の進歩發達するに隨つて、その利用の方面も非常に廣くなつた。
軍用として陸海軍共に飛行機が必須の物となつてゐる事に就いては、事新しく言ふまでもあるまい。軍用機には戦闘機——または驅逐機とも言ふ——偵察機、爆撃機



東京國際飛行場(東京市蒲田區羽田町)

等があり、それ〴〵職務遂行に適當した構造と設備とが施されてゐる。

實業方面に於ける飛行機の利用もなかく盛んで、郵便貨物の輸送を主とし、漁業上では魚群の發見に、農林業方面では播種や害虫驅除藥の散布、または山火事の發見に、商業上では廣告宣傳にまでも利用されてゐる。その他空中寫眞測量に用ひられては、人間の到底踏入れない森林地帯をも容易に測量される様になつた。

しかし、軍用以外の飛行機の用途として最も大きな意義をもつのは、航空輸送事業であらう。日本では漸く東京、大阪、福岡、蔚山、京城、平壤、大連間の毎日の定期航空路が開かれてゐるだけであるが、歐米諸國では定期航空輸送が始つてから既に十年にもなり、航空路網は非常に發達して、主要都市には必ず航空路の連絡

(一)朝鮮慶尙南道、釜山の東北方。

航空路網
航空路が非常に發達して網の目の様になつてゐるのを言ふ。

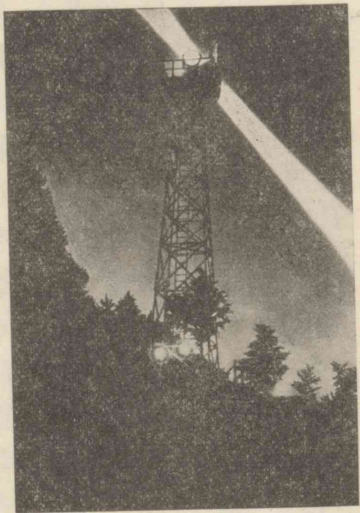
(1) Berlin.
(伯林)

(2) Tempelhof.

(3) Orlydon.

(4) Le Bourges.

がある。そして老若男女を問はず喜んでこれを利用してゐる。汽車で言へば停車場、汽船で言へば港にも相當すべき航空港もベルリンのテンペルホーフ、ロンドン(三)のクロイドン、パリのルブル



(津燒) 臺 燈 空 航

ジエ等はその代表的なもので、あらゆる近代的設備を整へてゐる。此所に一日中、晝夜を分たず數十臺の飛行機がひつきりなしに發着してゐるのを見ては、誰しも航空時代の到來しつゝ

ある事を覺えないではゐられないであらう。

人類がこの世に生れ出て以來の長いあこがれてあつた征空の夢は、今や完全に實現されたのである。

二〇 富士の大観

大町桂月^(一)

旅順にて黄金山を攀ぢし時の事なり、旅順要港部の司令官黒井中將我を導く。將軍善く談ず、話柄西歐の天に飛ぶ。イタリにてベスピオ山に登りし時、一ドイツ人道連となる。突然君はいくたび富士山に登りしか。と問ふに「一度登らぬもばか。二度登るもばか。」と答ふれば「富士山の如き立派なる山は、世界に二つとはなし。余は四回登れり。日本に生れながら一度しか登らぬとは、さてく勿體なき事なり。」と笑はれたり。とて笑ひぬ。余も知らず譏らず笑ひぬ。

高きより言はゞ、富士山に勝れるものは世界に多かるべし。されど正しき圓錐形を成し、偉大にして秀麗を極むること、世界中、富士に比すべきものなし。妙高^(一)、戸隠^(二)、立科^(三)、八ヶ嶽^(四)、箱根^(五)、天城などいはゆる富士火山帯の盟主なると共に、日本山嶽の盟主にして、略、日本の中央部

(一) 文學者。本名高知市。芳衛。大正十四年。五十七。花紅葉。白菊。日本文明史。學生訓等。著。が。あり。桂。月。全。集。に。收。め。ら。れ。て。ゐ。る。

(二) 話柄。Yasuyia。イタリ。の。ネ。ブル。ス。の。活。火。山。岸。

(一) 新潟縣にあり。高さ二四。四六メートル。

(二) 長野縣にあり。高さ一九。一メートル。

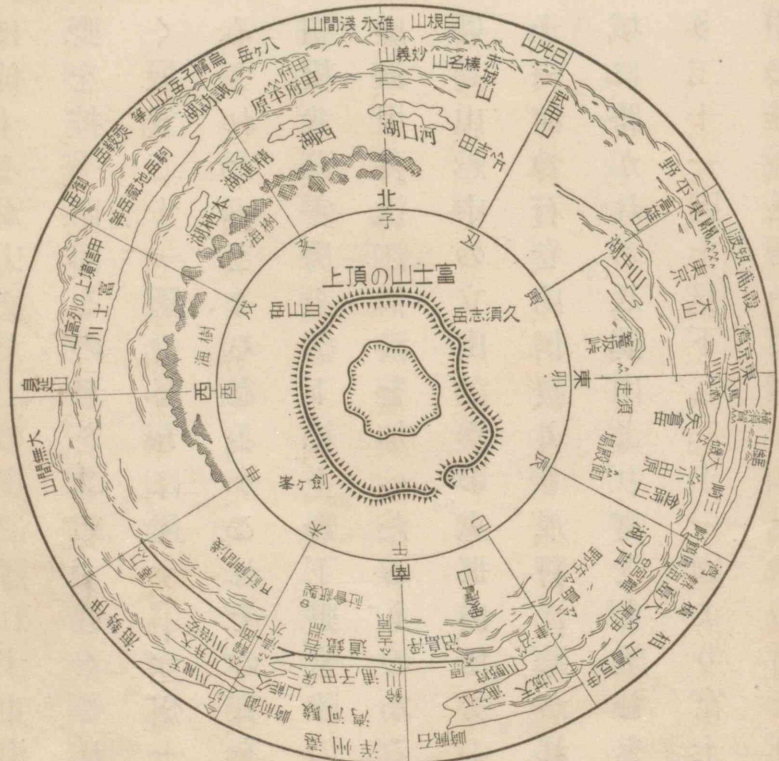
(三) 長野縣にあり。高さ二五。三〇メートル。

(四) 長野縣と山梨縣との境にあり。高さ二八。九メートル。

(五) 神奈川縣にあり。高さ一四。三九メートル。

(六) 静岡縣にあり。高さ一四。〇五メートル。

盟主



し。されど正しき圓錐形を成し、偉大にして秀麗を極むること、世界中、富士に比すべきものなし。妙高^(一)、戸隠^(二)、立科^(三)、八ヶ嶽^(四)、箱根^(五)、天城などいはゆる富士火山帯の盟主なると共に、日本山嶽の盟主にして、略、日本の中央部

に位するが、山また山の奥に隠れず、東海に接して周圍に裾野を控へ、四面その形を改めず、近くこれを一周するを得べく、展望二十一國の多きに達す。「十三州一目」とは、在來言ひふるされたる所なるが、これその實を失へり。十三州とは相模、武藏、安房、上總、下總、上野、下野、常陸の關八州の外に、伊豆、駿河、甲斐、遠江、信濃を加へたるものなるべきが、なほ越後の妙高山、越中の立山、美濃の恵那山、伊勢の朝熊山、尾張の小富士、三河の石巻山、信濃より飛驒に跨がれる御嶽、常陸より磐城に跨がれる八溝山より富士を望むを得べければ、富士より二十一國を見下し、二十一國より富士山を仰ぐなり。日本中の佳景と言へば、富士の見ゆる所なり。他の條件は具備せ

(一) 高さ二一九〇メートル。
(二) 高さ五三三四メートル。

(三) 高さ一〇一〇メートル。

りとも、富士見えざれば、何となくもの足らぬ心地せらるゝなり。

(一) 山は必ずしも高きを尙ばず、樹あるを尙ぶ。と言ひ、また山にして水を得ずんば生動せず。と言へるが、これ普通の山の事なり。一萬二千四百尺の富士山となれば、樹に超脱し、水にも超脱す。高いかな富士の山。全山十合に分つ。麓の一合が既に附近の群峯の上にある。(二) 香川景樹の
むらやまの高嶺々々をつたひ來て

富士の麓にかゝる白雲

はげに實況なり。脚底に雲を見、雷を聞きつゝ、攀行けば、下界を離れて天に昇る心地す。頂上よりは近く伊豆、相模、駿河、甲

(一) 實語教の句。
(二) 頼山陽「耶馬溪圖卷記」の句。

超脱す

(三) 江戸時代の歌人。京都の人。天保十四年(一八四三年)歿。年七十六。

斐信濃などの山々を見下し、駿河灣を見下し、相模灘を見下し、遠州灘を見下し、上總、下總の彼方の太平洋を見下す。太陽の直ちに海より出づるを見る。殊に下界を蔽ひ盡したる雲の海のはてより太陽の昇るを見れば、何人か神聖の感に打たれざらん。氣澄みて月近し。手を伸ばさば届かんとばかり思はる。李白が「不敢高声語、恐驚天上人」の心地も起るべく、下河邊長流の

富士の嶺に登りて見れば天地は

まだいくほども分れざりけり

の心地も起るべし。

普通一般に日本國民が、神聖の感に打たるゝは、二重橋外

(一)唐の詩人。寶應元年(西紀七六二年)歿。年六十二。
(二)江戸時代の國學者、歌人。大和の人。貞享三年(一七二三年)歿。年六十三。

白玲瓏

(一)江戸時代の國學者、伊勢の人。享和元年(一八〇一年)歿。年七十二。



より皇居を拜する時なるべし。若しくは水清き五十鈴川の彼方、鬱蒼たる神路山の前に、大神宮を拜する時なるべし。これを自然界に求むれば、白玲瓏の富士を仰ぐの時なるべし。萬世一系の天皇は人に士して神におはす。神の知らず日本は神州なり。藤田東湖は神州の正氣を歌ひて、秀爲「富士嶽」と言へり。日本に山は多けれど、神州にふさはしき山は、富士の外に求むべからず。東海に特立して、白玲瓏たる姿は、げに神州の山なり。神の山なり。本居

默契

宣長の「敷島の和心を人間は、朝日にはふ山櫻花を一
 轉して、敷島の大和心を人間は、朝日にはゆる富士の白雪」
 と言ひても、日本人に不同意はなかるべし。富士山は秀麗な
 り。正大なり。清淨なり。凜として氣高き趣あると共に、温かに
 して親しむべき趣もありて、神州の氣象を代表す。大和魂地
 に凝つて富士となれるか。富士山人に凝つて大和魂となれ
 るか。世界觀光の客なほ富士に傾倒す、神州の國民は、何人も
 富士と默契あるべきはずなり。

世には眺めて好き山あり。登りて好き山あり。富士や眺め
 ても好く、登りても好し。山を見下し、野を見下し、近く五湖を
 見下し、遠く太平洋を見下す。雲と路を争ひて登り、渴して千

(一)山中湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖

天風蓬々
 仙樂を奏す

秋の雪を掬す。頭上に明月を戴きながら、脚底に雷鳴を聞く。
 飛鳥は唯背を見る。動物も追隨する能はず。天風蓬々として、
 いづこともなく仙樂を奏す。

— 富士行 —

(一)詩人、名は鐵之助。明治二十九年東京市に生れた。韻律と獨語。高祖の詩集、著ある。

二 一 山上の花の草原

前 田 春 聲

私の前に樂園が現れてゐる。
 私はうつとりそれを見やつた。
 あゝ、すんなりした山の傾斜に、
 咲匂つてゐる限りない花の群。
 雪のやうに白い小さい花、
 桃色の花、赤い花、
 紫の花、緑の花、黄の花、

風に揺られる草の穂と花々。
 そして海のやうに緑した山の傾斜面。
 草原よ、
 それは天國の映像に違ない。
 何といふ美しい山の草原であらう。
 何といふ高山の清らかさ、
 何といふ草のよい匂、
 何といふ空に近い眺であらう。
 この世にもこんな素朴な花の世界があつた、
 深山の奥の山の上に。
 とこしへと、
 むかしの幻と、
 この息と、

山にみなぎる幸ひは、
 花や草にも霧にも漂つてゐた。
 そして空が深く晴れて、



(山元春筆) 山上樂園

太陽が山々に照返る時、
 地上一切の草や木の花の姿は、
 燃える頌歌にふるへてゐた。
 私の心は草原に埋れ、

一切の沈黙と美の中に夢みるやうに浮く。
疲れた衰へた生命よ。
この世にもこんな素朴な花の牧場があつた、
深山の奥の山の上に。

二二 偉人野口英世

「細菌學者野口英世の死によつて、我がロックフェラー研究所は、その最も卓越せる獨創的科學研究者の一人を、その最も敬愛されてゐる共働者の一人を失つた事を、世界のすべての人々と共に痛惜する。」

世界の醫聖と謳はれ、全人類の慈父と仰がれた野口英世博士が、西アフリカ、⁽¹⁾アクラの海岸に恐るべき黃熱病研究の

⁽¹⁾ 醫學博士、理學博士、ドクトル・オブ・サイエンス、ロックフェラー醫學研究所部長、昭和三年歿、年五十三。
Mockelher.

⁽²⁾ Akra, アシヤンチと言ふ州の黄金海岸に面する小邑。

聲明書

⁽¹⁾ Dyeing Post.



野口英世

犠牲となつて倒れた翌日、博士が籍を置いたロックフェラー研究所は世界の學界に向つて以上の如き聲明書を發表した。
アメリカのイブニング・ポスト紙は「博士は日本に生れたとは言へ、その功績よりすれば全人類のものである。博士の勇ましい獻身的生涯は、現代の範とするに足る。眞に博士の抱いてゐた理想は、自分を犠牲にして濟世の道を歩んだ聖者のその如きものである。」と、その長逝を哀惜した。

誠に博士野口英世は、日本を郷國とする世界人であつた。國境を越え、人種を超えて、研究貢獻した博士の卓越した學

世界人

濟世

勳は千載遠く傳ふべきものである。

博士は病理細菌學の專攻學徒として、その研究の範圍は殆ど全世界に互る廣汎なもので、研究發見の報告は實に百七十五篇の多きに上り、その多くは不滅の文獻として、全學界の至寶となつた。

博士が終生の研究道場としたロックフェラー研究所は、アメリカの富豪ロックフェラー氏の美舉によつて設立されたもので、現代科學界に雄飛する醫學の王國の觀がある。此所に集められた醫學者は、悉く各國の醫學界に萬丈の氣を吐く權威である。野口英世博士は恩師フレキシナー博士に選ばれて、その創成の業を輔けた。たとひフレキシナー博士にその

不滅の文獻

John

Davison

Rockefeller

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

年西一八三九

①Simon
Ilexner
ドクトル・オ
ブ・メヂシン
ロックフェラ
ー醫學研究所
長、米國學術
會議委員長
（西一八三六
三年）

鏤骨彫身
かつ（羸）

異常の天才を早くも認められたとは言へ、また學界多年の謎であつた蛇毒の研究にアメリカの科學界を驚歎させたとは言へ、異邦白面の一醫學者が、かうした所へ乗出して來た事その事は、アメリカ醫學關係者の驚異の的であつたに違ない。時に博士はなほ二十八歳の弱齡であつた。爾來二十餘年、博士の鏤骨彫身の努力は、醫學者としてのあらゆる最高の名譽を勝ち得るに至つたが、到底人間業とも思へぬ程の驚くべき精力と智力と根氣とを籠めたその廣汎深遠な研究發見の跡は、いかなるこの世の讚辭を以てしても語り盡し得ない。

フランスの一新聞紙は博士を讚へて、日本の生んだ近代

の驚異と言つた。事實、超人間的の偉大なその業績は、博士の生涯を飾つて永遠に輝く。それと共に、日本人が學術的に世界を壓倒し得る事は、博士によつて明らかに立證された。科學にとかく冷淡な傾のある日本人の中に、圖らずも博士の様な偉人が出現したのである。されど博士を生んだのは日本の國土であるが、彼を磨き、彼を鍛へて、限りない光榮を人類愛の上に享けしめたものは、實にロックフェラー研究所であつた。これを思ふ時、科學の尊重を高唱する心が頓に湧き、科學者に對する敬意を昂むべき必要を痛感するのである。

博士は地球を墳墓として冷徹明澄の理性を深め、苦闘精進した科學の使徒であつた。しかもその餘影には、聞くもゆ

冷徹明澄

使徒

勃々たる研究心

愆愆

倉皇故山

かしい數々の挿話がある。博士は生涯日本人である事を誇つた。そして故國をしのび、郷黨を思ひ、殊に骨肉を慕つた。日本を出でて十六年、繁劇な公務に縛せられ、勃々たる研究心に驅られて、日本學界の幾たびかの招聘、先輩知友からの切なる愆愆にも應ずる事が出來ず、遂に歸朝の機會を捉へ得なかつた。博士は、一たび故國から送られた一片の年老けた母堂の小影に接するや、倉皇として歸來し、故山に母堂の健在を喜んだ。博士はまた舊恩の人に絶大の敬意と感謝とを常に捧げた。その少年の頃、學僕となつて恩寵を受けた舊師に對しても、既に學界の高き權貴に立つ博士は、なほ生涯昔ながらの呼捨を以て呼ばれる事を求め願つたといふ。或は

(一) 福島縣(岩城國) 耶麻郡 猪苗代町

(2) Bonador. 南アメリカ西部の共和國
(3) Guayaquil.

Gnember.

(一) 母校猪苗代高等小學校以來、薰陶後援到らざる所なかつた良師に對しては、「自分は若しかの人に見出されなかつたら、牛追太郎で一生を終つたであらう」と、終生その恩に感謝したといふ。これ等は共にその人格の麗しさと清らかさとおのづから感じさせる話柄ではないか。

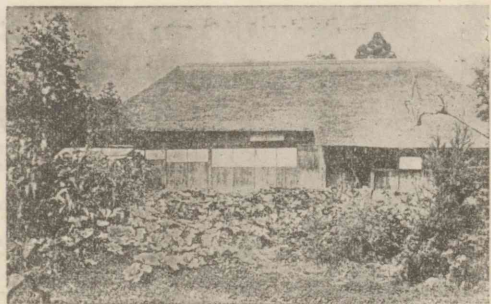
やしの森繁る南米(2)エクアドルの(3)ギャキル市に立つ青銅の標面に、
「一千九百十八年七月二十四日、ロックフェラー研究所のメンパーヒデヨ・ノグチ——日本の細菌學泰斗——黄熱病の原因を此所に創めて見出す。」

とある。先驅の勇者は業半ばにして悉く倒れたが、南アメリカ

大陸百千年の繁榮の途は、かくして開かれた。けれども同

獵獺を極める

天職に殉ずる



野口英世の生家

じ熱帯の西アフリカに更に兇惡な黄熱病が獵獺を極める時、博士野口英世は敢然としてこれが征服を志し、傷ましくも天職に殉じた。人道の父はかくして人類愛の前に悲壯な犠牲となつたのである。偉人野口英世。その生地は福島縣耶麻郡翁島村といふ猪苗代湖畔の一寒村である。

ある。

(一)實業家、學者、名は謙吉、萬延元年越後國(新潟縣)に生れた。隨筆類山陽、春城、顧筆、藝苑が一タ話等の著があ

二三 今

市島 春城

私はいくら字書を繙いて見ても、「今」といふ字より、より以上の力強い字を發見する事が出来ない。古來の賢哲、能く百代の師たり、萬世の範たる金言を遺したと言つても、「今」といふ語以上に力強い語を案出した者はない。正にこれ七首肺肝を穿つの語である。人生唯「今」あるのみ。昨日は去れる、「今」であり、明日は來らんとする、「今」である。回顧は過去つた事に對するものであり、豫想は假設であつて、我等にあるものは、唯「今」のみである。日月は移り、動植物は代謝し、天地は須臾も息まない。そして刻一刻推移し行く、「今」こそ宇宙の本體である。

七首肺肝を穿つ

代謝する

既往

これを我等の日常に見るも、「今」といふ瞬間程大切な時はない。事の成るのも敗れるのも、「今」にある。この瞬間こそ髓の底までも振ひ起す力がある。「今」の外に既往と未來とがあるかに見えるが、畢竟、既往は「今」の葬られた殘骸であり、未來は「今」のまだ生れない陰影であつて、其所には何物もない。既に葬られた既往を語るのは、死兒の年を數へる様なものであり、まだ生れない來年を語れば、鬼が笑ふと言はれてゐる。既往は追ふべくもなく、未來は期し難い。唯根強く迫り來る力は「今」といふ一瞬にあるのだ。既往に善なるもの偉なるものがあつたとしても、それはその當時の「今」に於て成つたものだ。更に再び善なるもの偉なるものを求めようと欲したな

らば、「今」これを爲す外はない。

今日しなくても明日あると言ふが如きは、天地不息の大道に背くものである。これを未來に期すと言ふ如きは、永へにこれを失ふと言ふに同じい。特に未來といふ別境地の存するのではない。「今」——現在の推移……これやがて未來である。未來に期すと言ふのは、畢竟薄志弱行者の遁辭に過ぎぬ。未來などいふ空虛を假定するのは愚である。何ぞ直ちに起つて今これを爲さざる。期し難い假定に遁れるのは、その優柔怯懦を自白するものでなくて何であらう。

薄志弱行者の遁辭
優柔怯懦

故に私は全力を「今」の一字に注ぎ、斷として「今」の一瞬を守る。一人の生涯、一國の運命、唯「今」に全力を傾注するに於て、始

直截

めて大成が期し得られるのである。「今」を外にして競争場裡に立つ事は難い。闘は「今」である。勝敗は「今」の一瞬にある。時は「今」と叫ぶ時、其所に果斷の決心があり、剛健の意氣があり、直截の邁進があり、奮闘の努力があり、その間一毫の惰容を赦さぬ、かくして全力の發動となり、渾身の熱血となり、精神一到して大事が成るのである。私は一意「今」を禮讚する。

昔、黒田如水は豊太閤の偉業を思つて或時問うた、「殿下の成功には必ず秘訣があるでありませう。願はくはそれを承りたい。」と。豊公は笑つて、「別に秘訣はない。唯過去を追はず、未來を慮らず、今日一日の事業を一心不亂に爲したに過ぎぬ。」と答へたとあるが、豊公も「今」の禮讚者である事が知れる。英

(一)父宗淳に茶道を善くした。これを伯まはした。元伯と號する。萬治元年(一八八一年)歿。

別懇

(二)今都市上京區。臨濟宗大本山。大德寺の住僧。近江の人。書畫を善くした。寛文元年(一七二一年)歿。

揮毫

雄豪傑の事業も、今の成功の積まれたものであるのだ。私は「今」といふに因んで、更に茶人千宗旦の一遺事を語らう。

宗旦が新たに茶室を建てたをり、豫て別懇の大德寺の名僧清巖和尚が、多分普請も落成に及んだであらうと尋ねて来た。宗旦は悦んで迎へ、普請は漸く成つた。どうか庵號を考へて下さい」と言つた。清巖は「いかさま尤もの事だ。しかし、何ぞ好みはないか」と問うた。宗旦は暫く考へ、古語に「懈怠比丘期明日」とあるが、いかにも面白く思ふと言ふと、清巖は「うなづき、成程面白い。人間の生涯は明日も知れぬ事だから、庵號を『今日庵』とされてはどうか。それでよければ額字は揮

倉卒

毫しよう」と言ふと、宗旦はひどく悦んだ。さて種々の物語に時移つたので、清巖が暇乞して去らうとすると、宗旦は引留め「今此所で額字の御揮毫を」と需めた。すると和尚「いや、それは餘りに倉卒。追つて認めて進じ申さう」と言ふのを、宗旦「然様にては今日庵の意にかなはず。只今此所ですぐお書き下されてこそ今日庵だ」と言ふと、清巖も尤も至極と筆紙を求めたが、即座に唐紙や筆を辨じかねた。紙は僅かに障子の張残りを見出したけれど、筆のないのに當惑した。をりから傍にゐた妻女が眉掃を取出し、「こんな物で間に合ひますな」と言ふに任せ、清巖は立所に「今日庵」の三字を書いた。これが千家に名高い額面である。清巖が揮毫を果して歸院する

と、程なく宗旦から使があつて、茶を進ぜたう御座いますから、只今すぐお出を願ふ」とあつた。清巖は不審を抱き、つい今まで話してゐて、そのをり何のさたもなかつたのに、妙な事だと思ひながら、直ちに出掛けると、先刻書いた額面は、針で留めて壁に掲げてあつて、宗旦は茶室開の茶を點てた。その日を越さず即日茶をふるまつた所に、宗旦の趣向があるの
入つたとの事である。

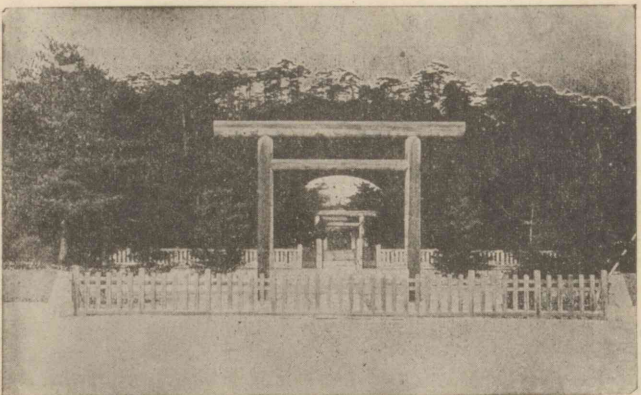
今、そのしごとを、
春城筆語

二四 桃山御陵 田山花袋

桃山の二つの御陵では、色々な事が考へられる。今を以て

(一)京都市伏見區
桃山町
(二)伏見桃山陵と
伏見桃山東陵と
北約一五〇から
桃山驛五〇東
メ北約一五〇東
皇治天皇との昭憲
太后との昭憲

(一)第四十代。奈良縣高市郡檜
隈大内陵。
(二)第四十一代。
后。天武天皇の皇
陵。
(三)桓武天皇の北西
桃山陵の北西
(四)第五十二代。



桃山御陵

古へを考へるといふ事があるが、實際私は、その前に額づく
と、私たちの見て來た事ばかりでは
なしに、遠い昔の事までも、取集めて
考へられずにはゐられないのであ
つた。私は其所で、天武天皇の陵へ後
から持統天皇の陵を合せた事など
を想ひ起した。また柏原の陵に御子
の嵯峨天皇が涙を流して祈念され
た事を想ひ起した。それは、その大小
はあつたにしても、昔はどの天皇で
も、皆私たちが見て來たと同じ様にして、一つ／＼その陵を

(一)京都市東山區
四條天皇を始
め數帝の陵の
ある所

築かれたばかりでなく、その當時の國民の悲歎をも俱にその中に混ぜて埋葬されたのであつた。であるのに、中世以後はどうなつたであらうか。さうした事は絶えてしまつて、あの京都の東山の南の外れに近い、^(一)泉涌寺の中に、微かにその存在を示されるだけになつたではないか。そして元からあつた一つ一つの陵などでも、亡びた國の帝王の陵でもあつかの様に、全く顧られずに何世紀かを過したではないか。中にはどれがどれだか分らなくなつた様なものもあつたではないか。つまり、それだけ國が衰へ世が沈んでゐたので、さういふ事をして置いてはいけないといふ事は、足利時代の將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またその後繼者も、みんな知

驕奢

徒爾

卑屈

らない事はなかつたのであらうけれども、或は經營に忙しく、或は戰亂に追はれ、或は自己の驕奢に心もしひて、其所まで手を出す餘裕はなかつたのであつた。しかし、長い間の歴史の波は漸く大きな物を打出して來た。私たちは次第に闇い闇い歴史から、眼もきらめく様を明るい方へと出て行つた。それを思ふと、維新の時に、山陵の荒廢に著目して、それによつて勤王の志を燃立たせようとした者のあつた事なども、徒爾には見逃してしまふ事の出來ない事實であつた。
桃山の御陵に參拜する者で、誰か我が大倭の昔を思ひ出さぬ者があらう。千年にして始めてその昔に還されたその明治天皇の偉きな功業を、自ら戸を閉ぢる様な卑屈な政治

脱却する

遭逢する

の状態から脱して、飽くまで外へくと伸びて行かうとしたその立派な對外の硬政策を、何等の好運ぞ。私たちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり、一層力ある世を、ありくと眼の前に見る事が出来たのである。佛教などの悪い方面にとらはれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脱却して、更に自由に、更に大きく呼吸づく事が出来る世に遭逢したのである。私は桃山陵の前に立つ毎に、いつも雄大な「時」の羽風が耳邊を掠めて通つて行くのを聞得る様な心地がする。

—花袋行脚—

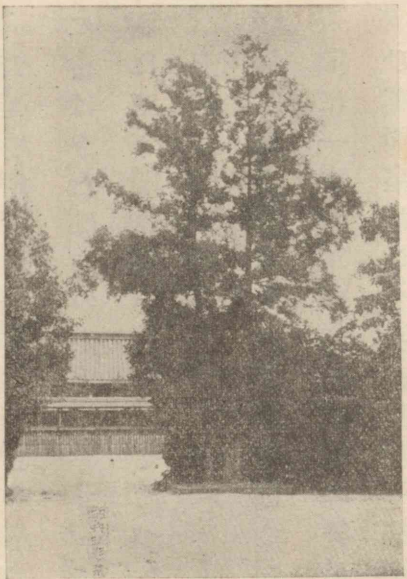
自修文

ゆかしの杉

幣(一)原(二)坦(三)

(一)歴史家、文學博士。臺北帝國大學三年大。阪府に生れた。大阪府史、小観、世界史の著者がある。

(一)福岡縣(豊前國)北端の開港場門司市。税關輸入品に税を課する事を司る役所。好意ねんごろなところ。
(二)山口縣(長門國)豊浦郡長門町の對岸下關市より東北約八キロメートル。



ゆかしの杉

門司で税關長の好意によつて、我が船の碇泊中に、長府の乃木神社に參拜する。神社の隣は乃木將軍の舊宅で、邸内は二百餘坪あるが、家の建坪は僅かに八坪餘に過ぎない。明治元年將軍が父十郎翁の指圖に従つて、北風を防ぐ爲に植ゑられた杉の苗は、もはや天を蔽ふばかりに生長し、將軍が歸郷の時汲んで昔をしのばれたといふ井戸の水は、東北隅の老梅の下に今なほ涌いてゐる。あゝ、ゆかしの杉よ、懐かしの梅よ。

この杉の影は今も唯二百餘坪の風を防ぐのみでない。梅の香はまた井戸の邊に薰るばかりでない。その影は世界に廣がり、そ

ゆかしの杉(自修文)

(1) Sudan.
エジプトスダ
ン。

(2) Khartoum.
ナイル河の上
流。

天涯地角
極めて遠い地

(3) Captain
Haggate.

見學
實地に見て學
ぶこと。

犬馬の勞
君の命にした
がつて力をつ
くすことの謙
稱。

(4) George V.
五年一
(西紀一八六

戴冠式
coronation
の譯。ヨーロッパ諸國の君主が即位後にする重要な儀式。

(5) Dublin.
アイルランド
の首都。

の香は天下に満ちるとも言ふべきである。ずつと前に自分がアフリカの内地を旅行した時、スダンの首府カルツームに於てすら、乃木將軍崇拜のイギリス士官に會つた事がある。天涯地角所もあらうに、こんなアフリカの内地で將軍崇拜者に會はうとは、この士官はキャプテン・レッグートと言つて、仙臺の師團に三年間見學をした人であつた。士官は自分に向つて言つた、

「私は日頃乃木將軍を敬慕してゐますので、何とかして生涯の間に、一度將軍の爲に犬馬の勞を執りたいと思つてゐます。幸ひ英國皇帝ジョージ五世陛下の戴冠式には、將軍もロンドンに來られるといふ。その頃には、私も此所の守備の任務を了へて、ダブリン聯隊へ歸營する事になつてゐます。萬一あなたがその頃英國にをられたならば、どうぞこの希望を將軍に通じて、

何か御役に立つ事に私を使つて下さる様取次いで下さいませぬか。」

自分は思ひがけない人に、思ひがけない依頼を受けて、初めは少し驚いてゐたが、敬慕の情が面に溢れてゐる様であつたので、取敢へずこれを承諾した。そこで士官は大いに喜んで、自分がカルツームを出發する時、堅い握手を與へたのであつた。

さてこの年の六月、英皇の戴冠式が行はれた。自分もその頃はロンドンに滞在してゐた。六月十日の朝、ハイド・パーク・ホテルに將軍を訪うた。これ一つには、日本使節の一行が無事にロンドンに到着されたのを賀する爲であり、また一つには、カルツームに於ける前約を履む爲であつた。恰も好し、將軍の接待係である在英國日本大使館附武官樋渡少佐は、自分が高等學校教授時代にその學校の生徒であつた様な關係から、この人を通じて、一應レツ

(1) Hyde Park Hotel.

使節
政府の命を奉じて他國へ使する者。

前約を履む
前の約束を實行する。

恰も好し
丁度都合よく。

(2) 現陸軍歩兵大佐(豫備役)樋渡盛廣。鹿兒島縣の人。

(3) 第七高等學校造士館。

ゆかしの杉(自修文)

萬端
事いろ／＼萬

Morning

coat

濃厚篤實

ものやはらかなこと。

旅順の猛將

乃木將軍は明治三十七八年の日露戦争の際、旅順攻圍軍の司令官として勇名を馳せた。

Balkan

バルカン半島の南部。

Balkan

ユーゴスラビヤの首府。

ゲート大尉の意を傳へてもらふ事にした。然るに將軍等の一行に對する萬端の接待は、イギリスの皇室に於て、痒い所へ手の届く様に行はれるのであるから、少しも個人の世話を要する事はない。そこで手紙をダブリン聯隊へ出して、餘りに失望しない様に、レット大尉へ申し送つた。事は成立しなかつたけれども、乃木將軍の英國士官の中にもこの様な崇拜者を有してをられた事が、今更の如く思ひ出されるのである。自分が將軍にハイドパークホテルで會つた時には、將軍はモーニング・コートを着て、外出しようとしてられる時であつた。それにも拘らず早速その部屋に通して、快く談話された。その濃厚篤實な事、少しも旅順の猛將たる面影を認める事が出来なかつた。春風のそよ吹く如き感じは、唯自分ばかりでなく、誰でも同じく與へられたものと見える。自分がバルカン半島を旅行してべ

Grand Hotel

識別
見分ける。

驚異云々

おどろき不思議に思ひながら。

裏切られる。反対である。

奇縁

不思議な縁。

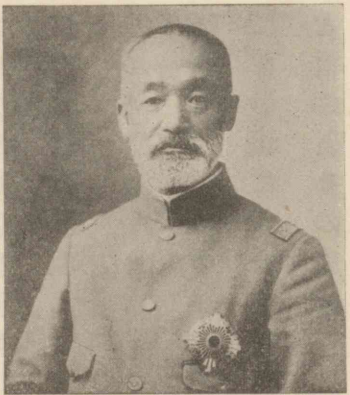
餘徳

先人の遺しておいた恩徳。

勃發

にはかにおこる。

ルグラードに著いた時、ランドホテルの番頭が自分を迎へてかう言つた、



「あなたは日本人でせう。私はもはや一見して日本人を識別する様になりました。なぜならば、數日前乃木將軍もこのホテルに宿泊されたからです。東洋の英雄はどんな希烈しい人かと、驚異の眼で部屋に案内しましたが、私の想像は裏切られました。將軍が濃厚篤實な君子であつたのは、全く意外でありました。この經驗は、私を將軍敬慕者の一人たらしめました。今日また此所に日本の方を案内するのは、奇縁の様に思はれます。」

自分は圖らずも將軍の餘徳を以て、世界大戰の勃發した災源

土著の人
その土地にす
みついでゐる
人。
歡待
こんせつなも
てなし。

地に於てさへ、土著の人の歡待に接する事を得た。
しかし、多くの外國人の中には、將軍の人となりを見解してゐる者が多いとは言はれなかつた。否、乃木といふ讀み方すらもよく心得ない人々もあつた。但し將軍に對する人氣は、たいしたものであつた。英皇戴冠式の行列の中に、東郷大將と同乗する乃木大將の自動車が現れて來ると、「ノガイ、バンザイ」と連呼する公衆もあつた。

自分は或イギリスの老婦人に將軍の事を説明して、愛子のすべてを戰場に失はれても、御國の御用に立つてくれた」と喜ばれたと言ふと、その老婦人はこれをうち消して、「そんな事は想像されるべきでない」と言つた。馬小屋だけは立派に建てられた事を述べると、老婦人は始めて感服して、「成程、動物愛護の精神にかなつてゐる。」などと言つた。

直覺的に
見ただけ開
ただけで。
共鳴
他人と同様に
感ずること。

斯様に國民性の異なつた國に行くと、乃木將軍の人格を知識階級の人に説明する事さへ容易でないが、そこになると、我々同胞の間では、どんな無學の人でも、直覺的に共鳴を感ずる。

將軍の葬式の日、自分の家族は電車に乗つて、青山の葬場へ赴いた。車中の人々も、「あなたはどこへ」「私は青山へ」と、多くは青山へ行くのであつた。身なりの卑しげな一人の老婆が、小倉の袴を著けた孫の手を引きながら、「あなたも青山へか」と人に問はれて、

「はい、さ様。私の一人子息は、旅順で戦死した際に、乃木大將の下で御役を務めて居りました。その御恩を思ひますれば、何として忘れる事が出来ませう。形見のこの孫をせめて亡き子息の代理として、御葬式に連れて行きます。」

一人子息が殺された時の大將を恨む事か、全くその反對に、忠實な感謝の誠意を捧げつゝある。この様な純潔な崇拜者を有す

心事
こころね。
金よりも更に
云々
命以外に人格
の必要なこと
を言つたので
ある。

(一)作者が歐米を
漫遊した時の
感想を書いた
もの。大正十
五年東京富山
房發行。

(二)儒者。號は梧
樓。陸中の人。
幕末の頃藩を
仕へ、尊王論
を唱へて活躍
した。明治十
三年歿。年五
十三。

(三)茨城県猿島郡。
(四)共に滋賀縣
甲賀郡。東海
道五十三次の
一。

(五)藤原藤房。吉
野朝の忠臣。

る乃木將軍の心事こころね。あゝ、誰か泣かされない者があらうか。
ナポレオンは必要な物を問はれた時、一に金、二に金、三にも金、
と言つたとか。これまでの日本には、金よりも更に必要な物があ
つたのである。
—^(一)世界の變遷を見る—

二五 繪畫の感化

^(二)那珂通高

下總國の古河驛(三)に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人あ
りき。その人、二十年許の昔、陸奥に來りて物語せし事ありし
を、今思ひ出でたれば、書綴りて人々に見せ參らせん。
茂足少き時東海道より京へ上る。近江の石部(四)と水口(五)との
間(六)に萬里小路中納言藤房卿の古跡と彫りし碑あるを見た
りしかば、その跡のゆかしさに尋ね入りて見るに、觀音寺と



按の下露 國米觀筆

うちつけに

會釋す
四方山の物
語

やんごとな
し

いふ寺ありて、其所に卿の念じ給ひしといふ観音を安置せり。その御佛の御前に、我より先に旅商人と思しき五十餘歳の男入り來りて、何事を歎くにか、さめくと泣きみたり。うちつけにその故を問ふべくもあらねば、立去りてもとの驛路に出でぬ。頃しも如月の初なりければ、日影暖かなる所を見出でて憩ひあたるに、かの男も出で來ぬ。茂足は「日影も暖かなり、ちと休み給はずや」と言ふに、かの男會釋して、同じ所に腰うち掛けたり。しばし四方山の物語して、さて後に、先には観音寺にて見掛け參らせしが、かの卿に深き御所縁などおはしますにや」と問ふに、いと恥ぢらひたる氣色にて、さては世に似ぬ歎せしをや見給ひけん。賤しき身のいかでやん

ごとなき御方に所縁などいふ事の候べき。但し、今日しもふと思ひ出でし事ありて、涙せきあへざりけるを、恥づかしくも怪しまれ候ひけん。懺悔には罪も滅ぶと承れば、若き時の罪滅しに、途すがら語り聞えん。とて、諸共に立出でぬ。

(一)今大阪市東區。

この男は津の國大阪の人にて、稚かりし時に父母を喪ひ、高麗橋(一)あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の

刀自
いとほし

(二)千葉縣山武郡。

お事

子は遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬ様なりしかば、父は怒りて、勘當しけれども、母刀自は一人の男子故、流石にとほしがりき。上總(二)の東金(三)に出店あれば、竊かに其所守る人に頼みて、**と**思ひ寄りしかど、遙々の旅路を一人遣らんも心許なくて、この男召出でて、「お事は御兩親共に世にまさぬ

具す

(一)埼玉縣東足立郡。

ば、何所に住むとも心安からん。後には必ず家分けて得さすべし、暫時が程我が子に具して上總の方に行きてよ。とて、金二十兩程預けられたり。さてその子と共に大阪を出でたれども、若き人の習にて、勘當受けし身のなほ過を悔いもせず、夜毎に酒を廢めざれば、中山道の(一)蕨驛(二)に來りし頃には、その金も残りすくなになりけり。

えせ者

明日江戸より船出せば、東金に渡らん事も難からじなど聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに、かゝるたのもしげなき人に具して出店に行きたらんには、たとひ母刀自の書ありとも、同じむれのえせ者とや思はれん。よしさは思はれずとも、この人の心をほらぬ程は、大阪にも歸らるまじ。とに

よしなき人
よすが

もかくにも、よしなき人に伴ひて遙かに來りけりと、悔し
さ限りなかりしが、また思ふ様、身を立てよすが求めんには、
江戸にまさる所やはある。此所まで來しこそ幸ひなれ、今宵
のうち、この人を捨てて歸らばやと思ひ寄りしかど、暫時
の程も貯なくてはいかゞはせん。かくと知りなば、預りし金
あるうちに、ともかくにもすべかりしを、後れにけりとま
た更に悔しがりけるが、この人の脇差は、その父の物好より、
百兩餘のつひえもて作りたる物なる事を思ひ出でて、よし
よし、これを盗みて賣りしるなさんには、十日、二十日の日を送
るに難き事はよもあらじと、心一つに謀りすまして、さらぬ
様にもてなしつゝ、今宵限りの旅寢なればなど言ひこしら

賣りしる

へて酒勸めて寢させぬ。

夜更けて後にそと起出で、枕邊に忍び寄りて窺へば、立て
まはしたる屏風の内に、鼾の聲のみ聞えたり。時こそよけれ
と、徐かに屏風に手を懸けて引きあくるに、内より行燈の火
影のさとさし出でて、後のふすま障子に映りたるを、人や來
ると驚きて顧れば、今まで見も入れざりしそのふすまに、藤
房卿の笠置(一)より後醍醐天皇の御供して大和の方へ落ち給
ふ時、松蔭に袖敷きて、その上に帝を寢させ奉りし形をなん
描きたりける。この男これを見て、あなあさまし、やんごとな
き御方だに、君の御爲にはかゝる習はぬ憂き目をも見給ふ
ものを、いかなれば我は主の物盗まんとまで思ひなりにけ

ふすま(襖)

(一)京都府(山城國)相樂郡、木津川の南岸、元弘元年(一一八二)醍醐天皇(北條氏)の爲此條に幸され

んと悔しくも口惜しく覺えて、寝ねたる人の枕邊に額づき、
繰返してその過をうちわびたりき。

かくて東金に到りて後も、憂き事あればこの夜の事を思
ひ出でて、六年、七年過ぎたりしに、その人の心改り、家に歸り
て父の跡を繼ぎしかば、我も約束の如く家分けて與へられ
たり。それより次第に仕合よくて、今は家業も子に任せて、あ
かぬ事なき身にはなりにたれど、さてのみ居らんも後めた
さに、をりくは此所らあたりまで物あきなひに參るなり。
さればいつとてもこの寺には詣でぬれど、今日しもふと思
ひ出でければ、若しそのをりしもこの卿の御姿を見參らせ
ずば、いかでかく事なくて世にはあり經べきと、忝さに涙は
後めたし
はふり落つ

まさなき心

ふり落ちて、君にも怪しまれ候ひぬ。我は賤しき生れながら、
若き時より軍物語の書讀む事を好みければ、その時しもこ
の事を思ひ出でて、まさなき心を改めぬ。よりて子供等にも
物讀む事は常に厳しくおきて侍りと語りぬとぞ。茂足はそ
の頃四十歳許の人なりき。

—洋々社談—

二六 明倫歌集より

ひとの親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に惑ひぬるかな

藤原兼輔

秋の日は山の端近し暮れぬ間に

はゞにみえなん歩め我が駒

大江千里

惜しからぬ命ながらもたらちねの

(一)平安時代の歌
人。世に堤中
納言と言ふ。
承平三年(一
五九三年)一
年五十七。後
平安時代の歌
(二)平安時代の歌
醍醐天皇頃の

(一) 江戸時代の歌人。京都の人。享和元年(三四年)歿。
 (二) 菊池武時。元弘の勤王家。元弘三年(一一九二年)戦死した。博多で戦死した。年四十二。
 (三) 江戸時代の大家。寶永二年(一七二五年)歿。年七十九。

(四) 奈良時代の歌人。延暦四年(七四五年)歿。
 (五) 平安時代の歌人。村上天皇の朝に仕へた。
 (六) 吉野朝時代の歌人。正文平。朝野歌人。年六十一。年六十八。寂。

(一) 江戸時代の國學者。和歌、文章を善くした。四文化八年(一七六一年)歿。
 (二) 鎌倉時代の朝臣。關白兼太政大臣。攝政となつた。博く和歌を善くした。永元(一一八三年)歿。
 (三) 鎌倉時代の朝臣。攝政の良朝の。子。從一位。大納言となつた。生歿年不詳。
 (四) 鎌倉時代の歌人。千載集の撰者。元久元年(一一八六年)歿。
 (五) 東京市淀橋區角筈。
 (六) 同區大久保。

ある世はかくてあるよしもがな(一) 小澤 蘆庵
 ふるさとに今宵ばかりの命とも
 しらでや人の我をまつらん 藤原武時(二)
 みどり子を見れば涙のかずそひて
 ありしむかしぞいとゞこひしき伊藤仁齋(三)
 埋火のあたりのどかにはらからの
 まどみせし夜ぞこひしかりける 松平定信
 かゝらんとかねて知りせば越の海の
 ありその浪も見せましものを 大伴家持(四)
 世の中にうれしきものは思ふどち
 はな見てくらす心なりけり 平兼盛(五)
 語るべき友さへ稀になるまゝに
 いとゞむかしのしのばるゝかな 兼好法師(六)

思ふどちまどみせる夜は唐錦
 たゞまくをしきものにぞありける よみ人知らず
 見せばやと人をぞしのぶ山櫻
 あかぬ心のへだてなければ 村田春海(一)
 我が國は天照る神の末なれば
 日の本としもいふにぞありける 藤原良經(二)
 神代より三くさの寶つたはりて
 とよあしはらのしるしとぞなる 藤原教良(三)
 神風や五十鈴の川のみやばしら
 いく千代すめと立て始めけん 藤原俊成(四)

二七 田園雜興 大町桂月

角筈(五)に住みし頃は三兒ありき(六)大久保にて一兒を失ひた

るが、今なほ四兒あり。上の三兒は男にして、末の一兒は女なり。我性、植物を好めども、動物を好む事更に甚だし。花美なれど、久しくこれに對すれば變化なきに厭く。動物には變化ありて、終日相對して厭かず。されど四兒をもり立つるに手のかゝるを以て、妄りに多く動物を飼はず。雞を飼ひしが、犬常に來り襲ひ、その一つ遂に犬に奪はれたり。かはいさうに思ひて、飼ふ事を止めぬ。小池を掘りて、鯉、金魚を飼ふ。我執筆に倦みて庭に出づる時は、先づ必ずこれに對す。その泳ぐ様何となく趣味あり。されどそれを見て喜ぶ小兒の様を見れば、なほ一層の趣味を感じず。移り住みてより二三箇月の間は、唯庭園を逍遙する事が面白かりしも、馴れては初めの様には

こよなし



大町桂月

珍しく思はず。小兒を連行けば、庭園常に一種の趣味を生ず。小兒の爲に蟬を捕へたり、栗を拾ひたり、また枯木を拾ひたりするにつけて、庭園の逍遙、常に愉快なるを覺ゆ。目的のある所活動あり。活動ある所常に新趣味あり。世に生れて目的のなき者は、遂に人生の趣味を解せざるべきなり。家庭に小兒あるは、庭園に花あるが如し。四兒もあれば閑をつぶすに餘りあり。成るべく戶外に運動せしめんとて、先づぶらんこ二つ設けぬ。生れて一年半許になれる女の兒も兄の眞似して、わらびの如き手に麻繩しかとつかみて、運動するを、こよなき

頑健

樂しみとするを見るが、こよなき樂しみなる親の心、子持たぬ人は知らざるべし。ひとり逍遙して面白き物見附けては、兒にも見せんとて戻り來る事あり。子庭に出でて久しく戻らざるに、何をなしゐるにかと懐かしくなりて、其所此所尋ね廻り、兒の名を呼ぶ聲を、空しく木魂に答へさする事も屢なり。

暇ある毎に庭園を逍遙するにつけて、樹木の様を見盡し、蟲を見盡しぬ。枝ぶりの面白き木は松、梅、楓、柿、櫻、百日紅などなり。松は庭園に附物なり。種類多く、枝ぶりも様々なるが、頑健の様に何となく卑し。梅はあばずれ女の如し。されど花をつくれれば憎らしくはあらず。百日紅の枝ぶりは、垢ぬけし

兀然

たる女の様なれど、皮の剥ぐるが疵なり。楓は勇肌いさみの男の如く、柿は實のみ賞せらるゝ物なれど、我その枝ぶりに一種の風情あるを愛す。杉はばか正直の人の様なるが、多く立ち並べば莊嚴なり。木の花にては櫻が花主なる事言ふまでもなし。草花にては我朝顔を愛す。その一朝にして落つる事、最も面白し。盛り久しき百日紅は人に厭かるべし。されどその花の色、桃李に優れり。概して花の美なるは實甘からず、實の甘きは花美ならず。唯桃李は二つながら併せ得たれど、花は梅、櫻に如かず、實は梨柿に如かず。常磐木、四時葉をつくれど、また常に枯葉を落す。木は花をつけたり紅葉したり、兀然こつぜんとして骨立したる物こそよけれ。

以爲へらく

衣食住のうちにて我以爲へらく、衣は垢つき居らずして、冬寒からざるだけなれば十分なり。我他に望なし。食物もからだ相當に滋養を取れば足れり。必ずしも美味あるを望まず。我は唯望む。家は壯麗ならざるも、さつぱりして、まはり込合はずゆるやかにして、樹木あり、眺望あらん事を。この望は角筈に住みて稍かなひ、此所に來りて最もかなへり。一生住めばこの上もなけれど、我が所有にあらず、賣物となりをれば、何れ買ふ人ありて追出されん事、角筈村に於ける如くなるべし。されど事の終りたる後より見れば、一二年もあつけなければ、十年もあつけなし。一生もまたあつけなし。一日住めば一日の願足り、一年住めば一年の願足る。買ふ人あらん

までは、余に取りては浮世の樂土なり。

二八 祖先を崇び家名を重んず

祭政一致

社會學上から上代の我が國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。即ち祭政一致の状態で、治者は神祇上も神もひとしくカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。また一方から見れば宗族政治で、宗家が分家を支配したものであつた。公は即ち大家（まゝぢ）であつた。かういふ事は強ち我が國に限つた事ではない。原始社會にはいくらかも類例のある事である。唯それが太古から今日まで持續し來つて、立憲政治の今日まで残つてゐるといふ事が、甚だ珍し

いのである。社會進化論の上に一特例を成したものと云つて宜しい。支那の文明を吸収し、印度の教義を採用して、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖德太子の方針で、今日までの變遷をなして來たに拘らず、この太古の政體に伴なふ所のカミ、オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴコロを今日まで少しも失はず、それで何等の争亂もなく、軋轢もなく、更に西洋の民主主義を入れて、立憲政體を成し得たといふのが、面白い所である。この昔ながらの國體で、今日の世界の間に闊歩して行けるといふのが、我が國民の強みである。さてこの神祇政治、宗族政治の根本となつてゐるものは、言ふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇して

軋轢

民主主義

闊歩する

仰慕する

これを畏敬し、これを仰慕する念がなければ、固よりこの様な政體の成立つ譯がない。神話の神々は、一方に於ては自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致されたのである。天照大神は日神、月讀尊は月神、素戔嗚尊は恐らくは風の神であらうが、これと同時に、我が民族のうちで、殊に優れた尊むべき方々であつたに相違ない。かういふ祖先の人々を祀つて御祭をするといふ事、即ち共同の祖先を崇奉して、其所に一致團結の政治が行はれるといふ事が、神祇政治、宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫に下されて、コレヲ視ルコト吾ヲ見ルガ如クセヨ」と仰せられたのは、祖先崇拜といふ事を明らかにされた

繼承

China

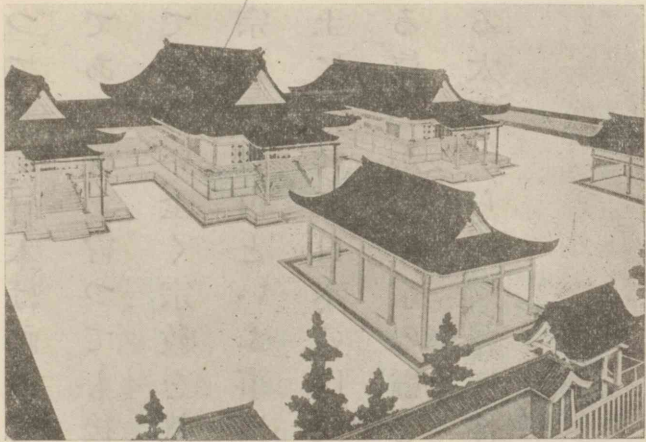
祖廟
神籬
(一)奈良縣磯城郡
城島村外山で
あると言ふ。

のである。即ち三種の神器をお承傳へになつた御方が、祖先の正統、政治上の元首で、いはゆるカミで、且オホヤケであるのである。それ故皇位の繼承には、三種の神器が最も大切な物になつてゐる。語を換へて言へば、我が國體上からは、どうしても祖先崇拜といふ事を忘れてはならぬのである。
祖先崇拜は支那人にもあるが、支那などの革命の國ではこれが國家と結び附いては何の意味をもなさぬ。ローマやギリシヤにもあつたが、今は跡方もない。日本では昔の神祇政治、宗族政治の政體が今日まで連續してゐるから、祖廟を尊みこれを祭る事は、大昔から今日まで、政治とは離れられぬ關係をもつてゐる。神武天皇が御即位式に神籬を鳥見山に

(一)第四十二代文
武天皇の
元(一三六六)
年(一三六六)
に成つた。

宣戰
講和

拜謁



殿三 中宮 殿神 所賢 殿靈皇

作つて、祖宗をお祭りなされたのは、即ちこれが爲である。今日でも毎年一月四日の政始には、「先奏伊勢神宮之事」といふ事があるが、これは大寶令時代からの定まりで、これを以て單に昔からの習慣と見るのは間違である。今日でも國家的意味のある事である。宣戰講和の詔敕を發し給ふ時に、神宮にお告げになるのも、その意味からである。宮中に賢所があつて、海外へ出向く人、または歸朝した人などが、拜謁と同時に

參拜を仰せつけられるのも、この政體の上からの意味をもつてゐる。日本は神國なり」と昔から人の言ふのはこれが爲である。神と言つても、後世に發達した各派の神道を言ふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の問題たる宗教の自由といふ事には、何等の關係がない。苟も日本の國土に生れて、日本の臣民たる者は、カミとオホヤケとに對する眞心から、祖宗の靈を尊むといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴なつた事である。

帝國讀本新制第二版卷三終

大正十四年二月十四日發行
 昭和五年八月十四日發行
 昭和六年二月十四日發行
 昭和九年七月十四日發行
 昭和九年十月二十七日發行

帝國讀本新制第二版
 定價
 卷一 一拾壹錢
 卷二 一拾壹錢
 卷三 一拾壹錢
 卷四 一拾壹錢
 卷五 一拾壹錢
 卷六 一拾壹錢
 卷七 一拾壹錢
 卷八 一拾壹錢
 卷九 一拾壹錢
 卷十 一拾壹錢

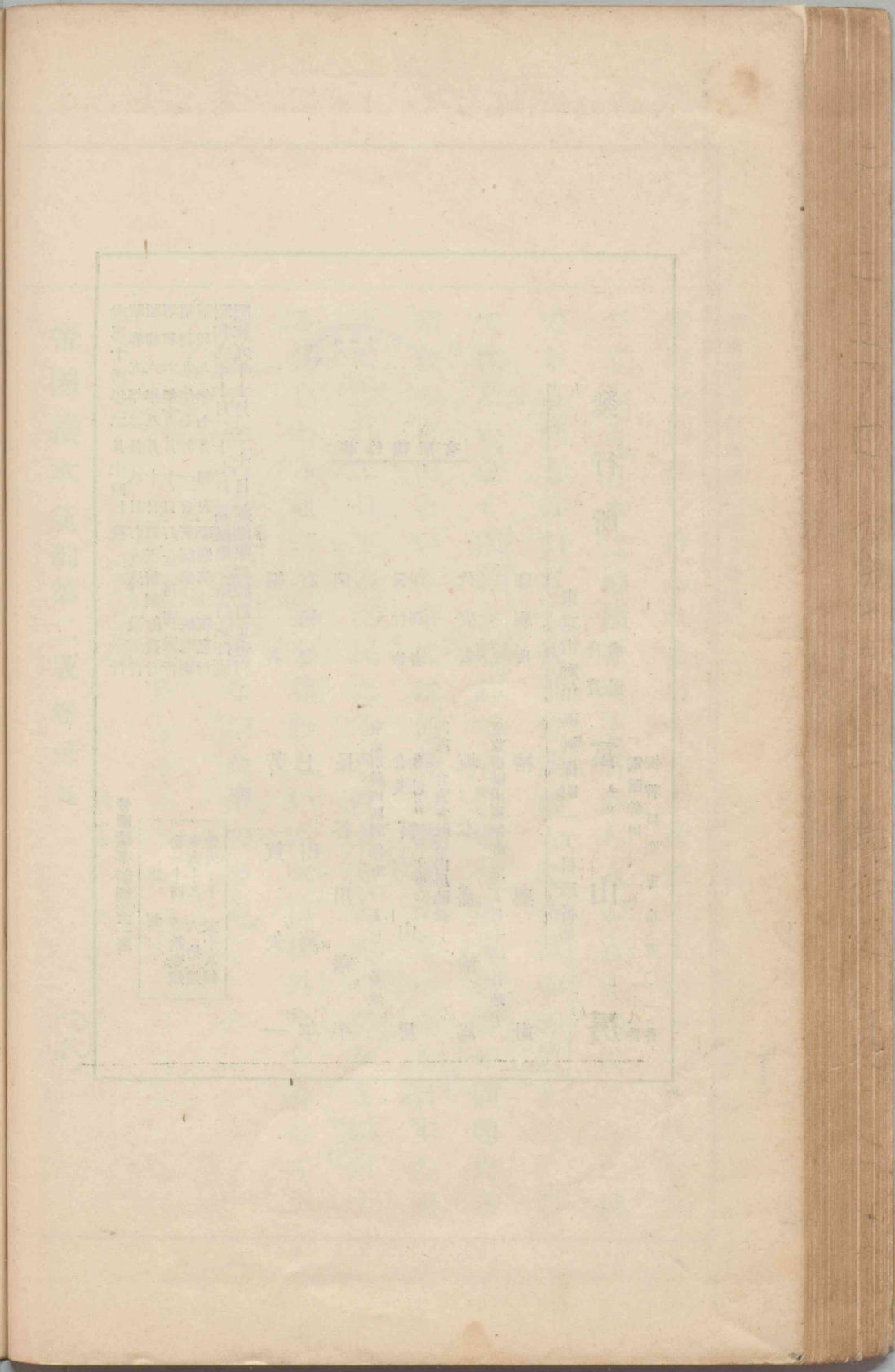
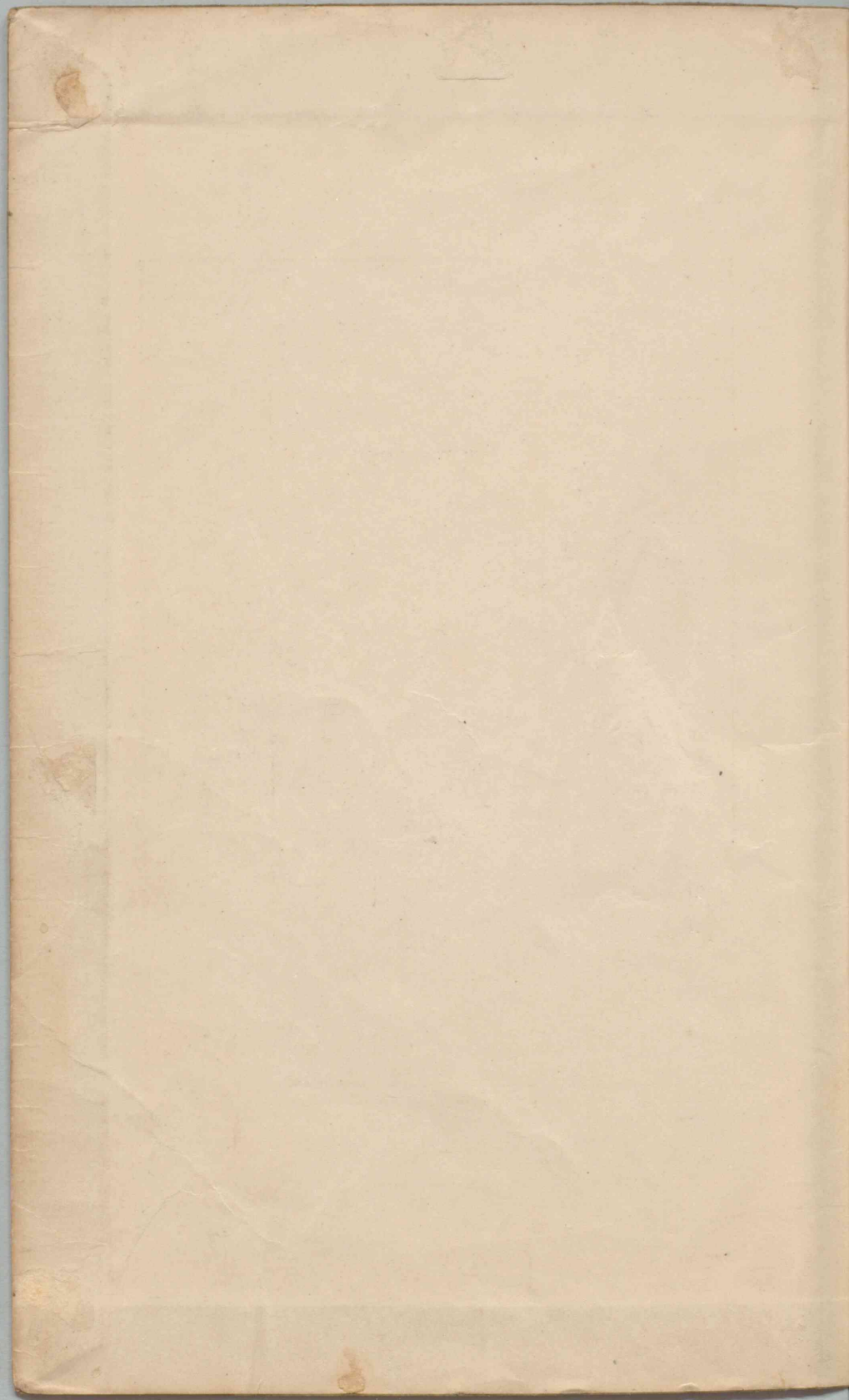
著者權所有

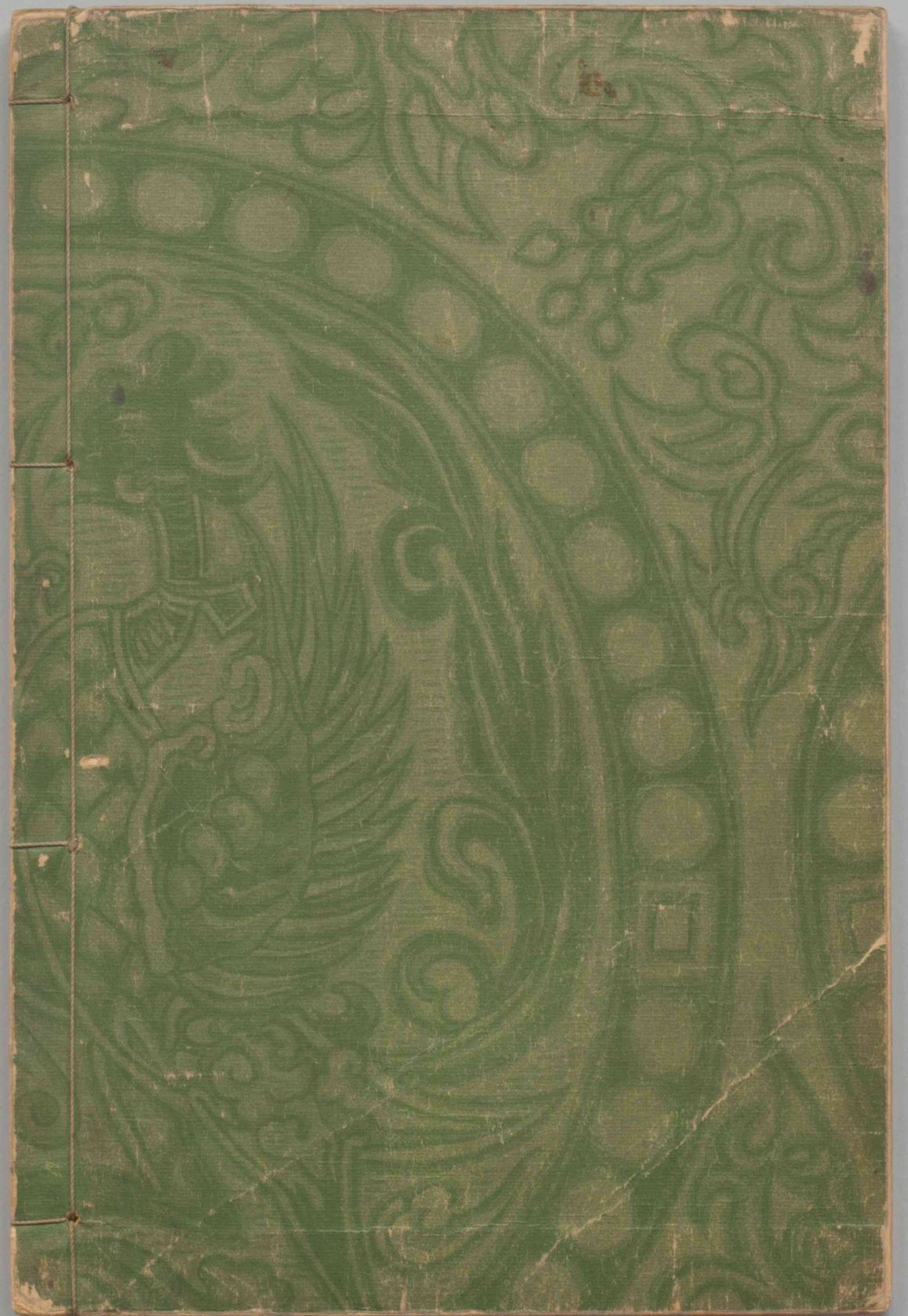
編者 芳賀矢一
 訂補者 上田萬平
 同者 長谷川福平
 發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地
 兼發行所 富山房
 代表者 坂本嘉治
 印刷所 東京市神田區錦町三丁目十一番地
 精興社

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地
 富山房
 電話 神田二、一七一、一七二、一七八番
 振替口座 東京五〇一八番







蘭外ノ軍情ノミ

ゼイカン コライ. テゲイチカラ ケニガク ケズノヨリヒ ヲイラウニキ
ミセツ ゼニヤラヤム アラカモヨシ バニタン オニコラトラジツ
リヨシニノ 猛將. ニキベツ キョウイラニタシ ニウラヤン キエシ
ヨトラ ボツハツ ドヤラノヒト カミソイ 4ヨツカクテキキヨクタイ
シニジ カネヨリ サラニラニヌシ

—— 世界ノ變遷ヲ見ル ——

自修文

ゆかしの杉

幣原坦

税關好意 天涯地角 見際 犬馬ノ勞 戴冠式
 使節 前約ヲ履ム 怪モ好シ 萬端 温厚 篤實
 旅順ノ猛將 識別 敬重云々 裏切ニ 奇縁 餘徳
 勃發 土著ノ人 歡待 直覺的 共鳴 心事
 金コリモ更言々

(補外ノ單語)

—— 世界ノ變遷ヲ見ル ——

現 ハ 精神 野口英世 卓越 謳
細菌學者 野口^英世 研究所 卓越 謳
獨創的 敬愛 共働者 痛惜 醫聖 仰グ
慈父 博士 恐ル 黃熱病 犧牲 倒レル
翌日 籍ヲ 置ク 醫學界 以 聲明書 功績
獻身的主 現 代 範 足ル 抱ク 理想
濟世 歩ム 聖者 長逝 哀惜 鄉國 傳フ
國境ヲ 越エ 人種ヲ 超エ 貢獻 學勳 千載
專攻 學徒 範圍 殆ト 互ル 廣汎 報告
篇 不滅ノ 文獻 至寶 終主 富豪
美譽 設立 科學 雄飛 觀ガレ
悉ク 萬丈ノ 氣ヲ 吐ク 權威 因心 師 選ガレ
創成ノ 業ヲ 輔ケ 異常 天才 認ム 謎
蛇毒 驚歎 異邦 白面 乘ホス 關係
驚異 的 違フ 歲 弱齡 爾末

6.9
7.0
9.0
5.6

5.5
6.9
7.3
7.5
6.7
5.39

コトバ
ヲ
カタカナ
デ
カキナサイ。

学年
組
姓
名

77. 8:
58. 56.
6.9 70.69
113 113.
1152 1152
17. 18.

5.36

1.33
1.14
60
33
2
3

2.54